

---

# NARUTO ~ナルトの義理の姉は十尾の最強忍者~

?魔歩?

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

NARUTO～ナルトの義理の姉は十尾の最強忍者～

### 【NZコード】

N8073W

### 【作者名】

?魔歩?

### 【あらすじ】

幼い頃、バケ狐の事件によって両親を無くしてしまった主人公。

そんな両親の形見と言つたら小さい時、我愛羅とお揃いで貰つた青いペンダントに十尾の封印物だけだつた。

## 設定です

設定からやつたいと思こます！！

天野璃南（璃南 莉奈）

- ナルトの義理の姉でもあつて、十尾もある。

- 尾獸にもなる。ナルトが赤の狐となり、莉奈が水色の龍になる。

### 【性格】

- 誰に対しても優しく、笑顔を絶やさない。
- 怒る時は半端無く恐ろしい www

### 【容姿】

- 黒髪でいつもボーティルかサイドテールにして縛つている。
- 瞳は澄んだ緑色。

### 【服装】

黒と紫をモチーフにした感じで：

- 短丈T & amp; ボーダータンク（黒& amp; 灰色）にサルエルパンツ（黒）を着用。
- マツリが腕に付けてた…ガードみたいなのを付けている。

### 【能力】

- 五大性質、医療忍術を使う。
  - 写輪眼、白眼に似て【劉冬眼】\*【龍樺眼】を使用する。
- 砂漠の我愛羅と同じ特質で【水】と【氷】と【草】が盾となる。

### 【口寄せ】

リクとしてポケモンのHンティ、ライコウ、スイクンを口寄せする。

三体の前足（右側に）木の葉の額当てがある。

- ・ドラゴンも口寄せをする。

- ・熊
- ・鳳の鸞駕州
- ・龍のゼシル

### 劉冬眼について

劉冬眼はテレパシーにもなつたり、耳と耳を通じて実際にその場の話や映像を映し出される。

未来を見る事も出来るから戦闘中にはすぐ役立つ。

### 龍樺眼

万華鏡写輪眼と似て、相手に幻覚を見せる。

龍樺眼はどんな強力な相手でも一発で死なせる事も出来る。

### 闇月ナイト

- ・璃南、歌怨と同じスリーマンセルの一人。
- ・チーム1の俊足もある。
- ・片手でも印を結び、容赦無く戦う。

### 【性格】

- ・毒舌な所もあるけど、シカマルのようにめんべくさがりな一面も。
- ・嫌いなものは”弱い奴”

### 【容姿】

- ・多分ですがポケモンの謎の人物だったかな…その人似。

### 【能力】

- ・属性が”炎”と闇でもあって火遁をほとんど使う。
- ・血縁限界の血が少し流れている。

### 【口寄せ】

- ・主に狼など野獣などを口寄せする。

### 音殺歌怨

- ・右頬には何かの紋章みたいなのがある。（ジエラール似）
- ・サクラみたいに人一倍の観察力と洞察力を持つている。
- ・怒る時は物凄い殺氣を出す。
- ・結構強い

### 【能力】

- ・主に属性は闇と雷。

- ・うちちは一族では無いけど[輪眼や万華鏡]と輪眼を使用する。

### 【口寄せ】

- ・悪魔などを口寄せする。（W）

### 【第1-1班の司令官】

雨野マコト

- ・天然な所もあり、時間にはいつも遅れる。
- ・図星になる事もしばしば…
- ・だが、特訓・任務になると厳しくなる。

### 【容姿】

- ・中忍試験の時の音隠れの額当てをした大蛇丸に似ている。

### 【能力】

- ・……不明。



## 主人公たちについて

### 天野莉菜

・ナルトの義理の姉もあり、十尾の妖龍を体内に封印している。天野一族の子孫でもあって、良く劉冬眼を使用する。

三体のライオンを口寄せし、戦闘。

始めての任務でも劉冬眼を活かし、チームをまとめた。両親を殺した張本人がナルトの体内に封印されている九尾だと知つても明るく振舞つている。

我愛羅との関係は、幼い頃、母親と砂の里に任務で言つた時に出会つた。（そこは本編で書きます！）

数年後、再開してから我愛羅の行動を可笑しく思う部分もあつた。

だけどそれでも我愛羅が心配という優しい性格の持ち主だった。

そして天野一族の血型で、死者を蘇らせられるといつとも出来るすごい能力の持ち主だった。

だが生き返らせる為の条件では、【その者を思う優しい心】で、その者を思う気持ちで蘇らせる力が変わった。

### 闇月ナイト

片手で印を結び、息の根を止める程まで戦うのが自分流。たまにM。他の人たちには冷たいがチームの人たちには優しい。

主に狼など野獸を口寄せする。

第十部では狼雷暴を口寄せし、闇月一族の忍法、『闇月忍法・豪華水煙？轟』を使う程だった。

だが、実際の力はこれを遙かに超える想定外のチャクラ量を放出すのだった。

莉菜を信頼していて主に心を開いている。

そして歌怨とはライバル関係（そう思っているだけ）であるらしく、最初は気が合わない…と思っていたまでだった。

また、マコト先生に始めて出会った時も敬語ではなく、タメだった。

音殺歌怨

クールで静かな性格（？）

影を自由自在に操る事も出来て、黒い霧で姿を隠す事もある。

## 001\* 忍術学校！――

始めまして天野璃南です。

両親を無くしてから1~3年。

私はそれでも挫けず、義理の弟でもあるナルトと頑張っています――。

お父さん・お母さん、天国で私達を見守っていて下せ――――――。

良く劉冬眼の練習で過去を見た事があつて…話によれば、ナルトのお父さんと私のお母さんが兄妹だつたらしくて…クシナさんとお母さんは赤ちゃんが物凄く欲しかつたらしくていつもいつも赤ちゃんの話をしてたらしいんだ。

お父さん（夜影ハヤト）は風影二代目様の孫であつてお母さん（天野慶樺）は兩隠れの里のくノ一だつたらしいの。

余り昔の記憶は覚えてないけど…この青い氷のようなペンダントが私を守ってくれるらしいの。

お母さんが私を守ってくれるように氷と水を用いてペンダントを作

くなる数日前にくれたんだって。

＝ナルトの部屋＝

璃南

「ナルト。起きて」

そんなナルトは夢を見てじるりしへ、寝言を言つてゐる。

ナルト

「もう…食べれないといよ〜〜〜」

＾＾影操つゝ

（はああああ…やりますか。）と心の中で言つて、印を結んだ。

ナルト

「ハハハ＾＾…璃南姉ちやん（滝汗）」

ムクッヒナルトの上半身が90°ピッタシになつて座つていた。

璃南

「ナルトへ言へ貴方は何時になつたら起きる仮?」

ナルト

「ゴメン…だつて夢のラーメンがすぐおこしつつ…ついに…」

：

璃南

「言い訳無用」

vv頭叩き起しの術vv

そう印を結び、言つとナルトは自分の手で自ら頭を叩いてた。

それが私自作の頭叩き起しの術。

以前前にも忍術学校の入学式で遅刻しそうになつた時、私自作のこの技を編み出した訳ですwww

＝忍学校・教室＝

璃南

「おはよー」

「 「 むさよー 」 」

いの

「 やつぱつ今日もサスケ君はかつゝこにわね～～～

女2

「 ナイト君だつてかつゝこにわよお～～～

女5

「 それいつなら歌怨君もよお～～～

サクラ

「 何言つてゐるの… サスケ君が一番よッ～～～

朝、 来ると必ず「 ね何だよね…

このクラスのほほ、 全員がナイトや歌怨やサスケに田が行くと言つ  
か…

私もその一人の女ですが… そつこつのは興味無い」と言つた… www

ナルト

「本当、サスケはうやむかいでばよ」

璃南

「……嫉妬、… まだまだ子供ね もやつぱり」

何で私は聞こえないよつて呟く。

イルカ先生もやつて來た事だし、皆席に戻った。

(飛ばします w)

イルカ

「さて… いよいよ明日は卒業試験だな。

毎年お馴染み”分身”の術のテストをする

ナルト

「えええええ……………また分身……………?」

イルカ

「（怒）ナルトッ!! お前は三年も卒業テストで落ちてるだろ  
ーがツ…………」

と、訳の分からぬ喧嘩が始まり……一人ずつイルカ先生に変化するテストをやる事になった。

＝＝＝次の日・卒業試験当日＝＝

イルカ

「えー……名前を呼ばれた者から隣のクラスに来るようだ」

出席番号順で座る為、私は一番前に座っていた。

天野だしね　ｗｗ

そんな後ろの席はナルトとヒナタが座っていた。

ナルト

「今年こそ絶対に受かってみせるってばよ……！」

ヒナタ

「ナルト君。。。頑張つてね／＼」

ナルト

「おひみあつゝ、璃南姉ちゃん、呼ばれてゐてばよ」

玻璃南

「本當だ、ナルト、絶対受かろうね じゃないとおじさん（一樂の）が私達の為にも作ってくれたラーメン、食べれなくなっちゃうよ？？」

ナルト

「璃南ちゃん、//頑張つてね//」  
ヒナタ

南  
璃

「うん ヒナタもね」

# II-IN隣の部屋II

ミズキ

琉璃南

「お願いします…」

＜分身の術＞

くくボオオオンツ！！！>>

イルカ

南  
國

「ありがとうございますッ！！！（涙）」

卒業試験が終われば、私は目にいっぱい涙の粒を溜めてイルカ先生から木の葉の額当てを受け取った。

それから… 時は過ぎて… ほとんどの人が学校の中から出て来た。

私は日光の暑さに負けて、木の上に上りナルトが出るまでずっと待

何分間も何時間経ってもナルトは出て来なかつた。

やがて生徒と親共々帰つていいくけどそれでもナルトは出て来なかつた。

流石に心配になつた私はイルカ先生の元に移動した。

＝＝＝職員室？＝

璃南

「あの… イルカ先生…」

イルカ

「おや？ 璃南じゃないか。

卒業、おめでとう」

璃南

「ありがとうござります…じゃなくて…ナルト、知りませんか？」

？」

イルカ

「ん？ ナルト？？知らないぞ。試験に落ちて凹んだと思つんだ…」

璃南

「……？…ナルト…落ちちゃったんですか？？」

イルカ

「ああ。所謂…分身は出せた物の中身が無い分身…だつたからなー…」

璃南

「そうですか…」

「「今年こそは絶対受かってみせる!!」」

「「璃南姉ちゃんー俺が受かったら一緒に一樂のラーメンで祝うつてばよッ!!」」

ナルト……あれだけ受かるって…受かってみせるって…

夕方で私は一旦、家に帰った。

ご飯を作つて待つてたけど夜の23時を回つてもナルトは帰つて来なかつた。

< < 鈴冬眼ツ ! ! ! > >

『どういう事だつてばよ……イルカ先生……』

血?大きな手裏剣??

先生がナルトを庇つてる???

『ナルト。その巻物をこっちに渡せ。お前がそんなの持つた所で意味は無いんだよ』

この声…!!ズキ先生?

まさか…木の葉の封印書をナルトが持ち出したの!?!?

気づけば私は、劉冬眼で見た森の映像とかの確認をして誰も使ってなさそうな森にやつて来た。

<<50M先・移動中>>

上忍が一人…ナルトが巻物を持って移動してる…てことは…ナルトが危ない。

何としてでも助けなきや…。

風を切るかのように私は猛スピードで向かった。

((キイイインツッ))

手裏剣がぶつかりあう音がする…。

様子を見る為、私は近くの高い木の上で様子を見た。

ナルトがいない… イルカ先生とミズキ先生が戦ってる…

それにイルカ先生が血だらけ… どうこう事???

そして… イルカ先生が痛みの余り、倒れた。

それで九尾の封印がナルトのお腹に浮かび上がった。

「…………」

ミズキ先生が最後のクナイで決めようとした時、ナルトがミズキ先生を殴り返した。

( )

ナルト

「分身……が……出来たつてばよーッ……！」

璃南

「ナルトッ……！」

その声にビクッと身を震わせるナルト。

ナルト

「璃南姉ちゃん……その……（汗）」

璃南

「怒りたいのもあるけど……これでナルトも卒業試験、合格だね（に

こ）

ナルト

「…え…？」

イルカ

「ああ。璃南の言つとおりだな。…てかいるなら手伝いに来てくれよ」

璃南

「えーwww木の上で観戦してた方が良かつたかなーとwww」

イルカ

「全く…だけどナルト、卒業おめでとう」

そういう顔当てをナルトに差し出すイルカ先生。

私も優しい笑みを浮かべてナルトを見つめる。

ナルトは大泣きをしながら抱きついて来た。

璃南

「ナルト〜。イルカ先生は負傷中だよwww」

ナルト

「わわわわ（汗）悪いってばよッ－！－！イルカ先生－！－！」

イルカ

「アハハハハハ」

璃南

「つて治療しないと－－－先生、本当に死ぬよ？」

イルカ

「それだけは駄目だッ－！－！璃南頼む－－－直してくれ－－－」

ナルト

「イルカ先生ツ－－！－！死なないでつてばよ－－－（抱

璃南

「アハハハ」

お母さん…お父さん…アカデミーの卒業試験、合格したよ

これからも私達を見守つていて下さい

## 002\* チーム発表&初めての任務はBランク！？+前編+

あれから…楽しい日々は過ぎて今日は下忍としての説明会が行われた。

勿論ナルトはそれまで額当てをせずに大事にしまって置いた。

そんなナルトは今日、ノリノリ状態

ナルト

「璃南姉ちゃん…俺つてば似合つてる？？？」

璃南

「んー…どうかなー？？」

ナルト

「ええーーーーー（泣）だけビセーーーだけビセーーー今日から下忍なん  
だよなーーー」

璃南

「ナルトもよひやくアカデミー卒業したしね  
一楽のおじさんもすゞく喜んでたよね」

ナルト

「そ、うそうーー！」「ナルトも、やつと合格かー」「何て泣いてたつ  
てばよなーーー！」

璃南

「それ程ナルトは子供だったって事だよね～」

走り出す私。

ナルト

「子供じやないってばよシーーーーー！」

と言い、その後を追うナルト。

だけどナルトは少しだけ成長したかもね

==EN==

ナルト

「 」 」 」 」

璃南

「 それ程嬉しいの？」

隣同士で座る事となつた私達。

その窓側にはサスケが座つていた。

ナルトがどうしても”サスケの横は嫌”って言つて何故か私が真ん中に座る事となつて……

そんな中でも他の女子達は誰が座るかとかで喧嘩中。

ナルトは御構い無しに変な不気味な笑みを浮かべる。

ナルト

「 やつと下忍だつてばよーーヒヒー

？？

「うわwww何変な笑みを浮かべてんだよwwwてか何でお前がここにいんだよ?????」

ナルト

「シカマルうーこの額当てが田に入らないかつてばよ~???

シカマル

「マヂかよ…お前、合格したのかよ~。めんどくせーー」

奈良シカマル

口癖は「めんどくせーー」「らしいんだけど……」

シカマルの主な属性は影。

奈良一族では「「陰操り」」「「影真似」」など使うんだ。

ナルトは良くシカマルと一緒にいて、つい最近まではキバ、チョウジ、ナルト、シカマルの4人でイルカ先生に怒られてたぐらいなんだwww

それ程、ナルト達は義務教育上大変だったらしいの……

私が熱で寝込んでた時も学校から連絡があつて、ナルト君が君を殴つてます！！お姉さん！！どうにか止めてください！！！」「って本当、声からして大変そうだったけどね……。

いの

「やつば額当て姿のサスケ君もかっこいいわね」//

女  
3

女  
2

「何言つてゐの――！歌怨様が一番よ――――」

三人（サスケ・歌怨・ナイト）

二

ああ……逆効果だつたね……

「はいはい。五月蠅いぞー。席に着けー」

「「はあーい」」

イルカ

「まづー…卒業おめでとう。これからは木の葉の忍びとして役に立てる様頑張る事だ」

「「はあーいーーー」」

イルカ

「よし。今日、ここに呼んだのは二忍一組での班を作る事だ。  
これから先、任務をこなして行く上でその二忍一組で協力をして強くなつていくんだ。

そして割り当てられた上忍の先生とも絆を深める事だ。」

「「はあーい」」

イルカ

「名前を呼ばれた者は返事をするよつこ

「「…………第七班。うずまきナルト、春野サクラ、うちはサスケ」」

何か…ナルトの反応が面白いwww

「「第十一班。天野璃南、闇月ナイト、音殺歌怨。以上の三名だ」」

ナルト

「闇月？？音殺？？？」

え？何か女子は羨ましそうな瞳で見て来て、男子は目が死んでるんですけど…www

イルカ

「もう少ししたら上忍の先生が来るから、それまでに待機するように」

そういう、ぞろぞろと上忍の先生が入ってきた。

「「第一班の者」」

そして…教室に残ったのは…

ナルト

「遅いってばよッ！－！」

ナイト

「黙れ。ウスラトンカチ」

ｗｗｗｗｗ

ナルト

「何ー！－？」

サスケ

「ボソ）ウスラトンカチ…一人」

これは聞かなかつた事にしといてもいいのかな…

ｗｗｗ

サクラ

「何してるのかな…」

後残つてるのは第七班と第十一班のみ。

退屈して来たｗｗｗ

（（ガラガラツ

？？？

「すまない。遅れた。第十一班の者は？」

璃南

「あ、ヽヽヽはい」

何故か私達三忍はジャンプして教卓の手前で着地した。

？？？

「すまない……では行くとするか」

ナルト

「なッ！……俺達の上忍まだー！ー！」

教室の向こうでナルトが叫んでいたのにも関わらずナイトは「バタンッ」「と閉めた。

＝＝＝噴水＝＝＝

？？？

「任務で少々遅れたが……自己紹介から……とするか

歌怨

「まず、貴方から名乗って下さい」

？？？

「そりだな。俺は雨野マコトだ。好きな事は……無いな。嫌いな物は……特に無いな」

ズコッ。

ナイト

「結局分かったのって名前だけだろ」

マコト

「ハハハ。まあ次はお前達の番だ。左端からだな」

歌怨

「音殺歌怨。好きな事・嫌いな事を教える気はない。  
俺の野望はある男を”殺す”事だ」

マコト

「（……せよっ……）次」

璃南

「天野璃南です。好きなというより…大事な人がいます嫌いな事とかは…今はありません」

マコト

「（十尾の少女か…）次…つて最後かw」

ナイト

「闇月ナイト。嫌いな者は五月蠅い奴に弱い奴だ」

何か…悪意のこもった自己紹介だね…：

マコト

「歌怨に璃南。ナイトだな^ ^よし。早速明日は任務という事だな」

璃南

「え？？早速任務何ですか？？？」

マコト

「ああ。お前達三忍はアカデミーでの能力を見た限り、下忍とは思えない程の実力だ。

それにこの任務は火影様からの案もある」

ナイト

「んで、何ランク?」

マコト

「Bだ

「「B!?」「

マコト

「主に警護だな。今回の以来内容はある人物を無事に家までお届けする事だ」

歌怨

「案外…すごいな」

マコト

「だろう。Bランク共言えども中忍・上忍向けの任務だ。それにこの任務には深い意味は無いと思つたら大間違いだ。この任務を通してこの四人の仲を深める事も大事だ。一人一人が自分勝手な行動をせずに、仲間を助ける思いやりの気持ちも大事だ」

「「はい」「

マコト

「よし。今日は一日解散…だなへへ」

「「あつがといひこました」」

と、言いそれぞれ散りばる。

＝＝＝＝＝

冷蔵庫に張られた紙を見た。

『璃南姉ちゃん。

今日はカカシ先生の家で泊まるつてばよ。

明日には戻るつてばよ。それじゃーおやすみだつてばよ』

璃南

「明日…か…私も朝早く出かけるんだよね…」

私はナルトが書いた手紙の下ラ变にも書いた。

『ナルトへ。

そつか。帰つて来たら感想を教えてね

それと今日は任務で留守なので、冷蔵庫の中に牛乳が閉まつてある  
し、

戸棚の中にもカップラーメンがあるからそれを食べてね。  
それと人には迷惑を掛けない事』

それだけ書くと私は自分の部屋に入つて行つた。

明日の… って言つたとしても期間は一週間になるかもしれないしね  
… 忍具とかも沢山いるだろうし。

時は過ぎて…次の日。

朝早く起きて木の葉の門前に向かう。

そこが待ち合わせ場所になつてゐるにも関わらず… 一時間経過。

歌怨

「上忍はまだかよ…」

璃南

「…はああああ。」

ナイト

「…………あんな上忍が俺らの先生でいいのかよ……」

璃南

「……多分大丈夫…かな?」

歌怨

「疑問になってるが」

璃南

「アハハ^ ^ . . .」

沈黙になつた数分後、風と共にマコト先生ともう一人、年老いたおじさんがいた。

マコト

「いや~遅れた。すまないな~」

歌怨

「今回、警護するのはそちらの方ですか?」

ナイト

「しかねえーだろｗｗ」

マコト

「まつ、そういうことだな。船橋さん。一いちらが私の部下共です」

船橋

「こんなガキ共に任せてもいいのか～？？」

ナイト

「なッ！？」

船橋

「よつぽどの実力だと聞いたんじゃが…」

歌怨

「……ナイト。落ち着け」

今にでも飛び出しそうなナイトを歌怨がナイトの影を踏み付けた。

マコト

「まあまあ。そこまでにして行くとしましょう。

明日の朝までには國の方まで届けなければ行けない訳だからなあ～」

と言い、歩き始めた。

何故か私達三忍が前を行く事となり、真ん中には舟橋さん。

その後ろにはマコト先生が着いていた。

ナイト

「ボソ））何だよ。船橋って人。まるで俺ら忍びを馬鹿にしてるみてーじょんかよ」

歌怨

「そう思つのは仕方ない事だ。俺達は俺達。船橋さんは船橋さん。思考能力は人それぞれだ」

ナイト

「何だよそれ…天野はどう思つ?..」

璃南

「んー…確かに人それぞれっていうか…」

ナイト

「お前も歌怨の方かよ…つまんねえーの」

歌怨

「任務に集中したらどうだ？」

ナ  
イ  
ト

「やんのか？」

琉璃南

「は」

卷之三

「溜息」

۷۰۸

离  
南

「ボソ）（微妙に船橋さんにも舐められちゃつてるし…）」

ナイト

「ボソ））アイツのあの顔、気にくわねえー」

璃南

「だからって殺しちゃ駄目だよーー！」

ナイト

「これも任務。殺しちゃ意味が無くなるだろ」

貴方は何が目的なの?と私は聞こうとしたけど聞かない事にした。

進む事、数時間。

只今・昼食準備。

私と船橋さん以外、岩だけの片隅で昼食の準備中。

私は主に魚とかを吊るしてる訳なんだけど…

まず火が無いと出来ない訳だし…私は水と氷なら出せるけど…

あー…どうしよう…と、困つてた時に…

ナイト

「どけよ。じゃないと、火傷するぞ？」

私はすぐさまびくとり、口に手をあてて片手で印を結んだ。

<<火遁・火柱の術>>

中火ぐらいの炎でみると、火が大きくなつて行つた。

璃南

「あつ、、ありがと。後は…塩とかか…」

ナイト

「塩なら…確か…」

マコト

「ほり。塩だ」

手で受け取るよりも先に水が受け止めては私の手の上に載せてくれた。

歌怨

「……今は……」

璃南

「ああ。今の水の事っ？」

ナイト

「すげーな～～」

璃南

「あっがとう～～！ さればお母さん達の形見とこいつか……私を守つてくれるよつてしてくれたの」

マコト

「成程……つまりは無傷とこいつ事になるのか……」

璃南

「はー」

後編に行きます

## 003\* 初めての任務はロマンスク!!? +中編+

マコト

「そういう人がチームにいてくれると楽しいな」

璃南

「あっがとうござまわ」

とまあ焼けた魚を食べながら作戦を練っていた。

いつ、敵に襲われても可笑しく無いように…とこつらしこの。

ナイト

「やつにえは…どに届けんの?..」

マコト

「雷の国・雲隠れの里だ。そこには沢山と言つても良い程に忍びがいる。

火影様から聞いた話では狙われている…という事でしたが…」

船橋

「…………そこまで聞いていたんじやな…………」

(「(君)からは波の里と似るかもしけません^ ^」)

歌怨

「どうこう事ですか?」

船橋

「イチガロー・ポレクション…ガトー・海運会社並の金持ち会社の奴ら  
なんじやが…  
つい最近、わしが持つペンダントを狙つておるんじやよ…  
それがこのペンダントじやよ」

ナイト

「何だこれ…紫色で光つてて逆に眩しい」

船橋

「だが…話によれば、ある一定の人物にしか効果が發揮しない…らしいんじゃよ」

璃南

「一定の人物?…とは??」

船橋

「それは…お三（キイイイイイン）」

歌怨が食べよつとしていた魚に手裏剣が刺さっていた。

毒入りの手裏剣だったのか…魚がすぐ黒くなつた。

船橋さんは急いでペンドントを隠すけど、手裏剣を連発で投げつけられるのも、私は船橋さんを庇い、その上から水が守ってくれていた。

ナイト

「何なんだよ……てか何気に無傷だし」

璃南

「それが、水の能力なんだもん……」

歌怨

「来るぞ」

今度は炎で焼かれそうになつたが氷が大きな盾となつて私達五人を助けてくれた。

???

「チツ。早く死ねよ」

マコト

「大丈夫か……」

璃南

「何とか……」

ナイト

「天野の氷で何とか助かった」

歌怨

「まさか敵がわしきの船橋さんの話を盗み聞きしてたのか??」

マコト

「その通りだな。すぐにここから出発するぞ」

何とか脱出し、早足で向かっている途中。

璃南

「(やつぱBランクは難しいね…いつ、どこから敵に襲われるか分  
からない訳だし… )」

マコト

「.....」

歌怨

「.....」

ナイト

「…………」

船橋

「…………」

その後、重苦しい空氣の中、私達は進んだ。

だけど…行く先も…さつきから同じ道を通りている氣がする…。

マコト

「嵌められたな…」

歌怨

くく『輪眼』くく

マコト

「『輪眼か…どうだ? 分かった事は???

歌怨

「…多分…幻術だ。」

だけどこの幻術は『輪眼では見切れない』

ナイト

「どうこいつ事だよッ……」

船橋

「……」

璃南

↙↙劉冬眼↙↙

マコト

「（劉冬眼…やつぱ十尾の少女だな…）」

璃南

「…50M先、出口ある。

少し行つた先には敵がざつと7人

マコト

「よし。歌怨、ナイト。戦いの準備をしておけ。  
そして璃南。そのまま劉冬眼を使つていってくれ。  
いつ敵が襲つてくるかが分かんない訳だ。  
それと船橋さんの近くにいて、守るんだ

璃南

「はーーー。」

ナイト  
「殺しても良いんだよな?」

マコト

「・・・まあ良いだろ?」

歌怨

「そんな事を聞いたとしても最初から手加減無しで行ひうとしていただろ」

ナイト

「ケツ。まあそんな所だな」

璃南

「…敵、続出」

マコト

「行くぞ」

走り出すのは良いけど… 船橋さんがすこく辛い。

璃南

「後10M」

三忍はクナイを用意し、先に走つて行く。

少し先からは戦つ音がトンネルのそこまで響き渡つてゐる。

数分して…マコト先生がやつて來た。

マコト

「いやちは終了だ。どうだ?」

璃南

「……敵は雷の国周辺にいます。  
今は何とか大丈夫だと思います」

マコト

「そうか。船橋さんもご無事ですか?」

船橋

「ああ。大丈夫じゃ」

ナイト

「マコト先生。

もう少し進むのか？」

マコト

「まだ毎回だが……こっちで野宿とするか。

お前達もさつきの戦いで術の使いすぎで疲れているだろ？

歌怨  
「ああ。傷も結構付けられたしな……」

船橋

「だがこいつは辺で野宿して襲われるじゃねえ？」

マコト

「安心して下さー。こいつらも幻術で寝場所を隠します

」  
そういうとマコト先生がテントを作り、幻術で見事に隠した。

ナイト

「あー……痛つてー……」

バッグを置くと、治療中のナイトの所に向かった。

璃南

「やるよ 絆創膏とか、貸して」

ナイト

「……ん」

消毒中…大人しく静かにしてくれてやりやすかった。

璃南

「はい。後は絆創膏を上から張るだけだね」

冷たい冷たい氷で冷やした絆創膏を張つたら絶叫した。

ナイト

「貴様ツ（泣）俺が炎の属性だという事を知つて…ひでえ（泣）」

璃南

「だつてね～、今の毒針があつたんだよ？  
まあ私が医療忍術を使わなくとも何とか戻つたけどさ」

ナイト

「天野つひむ…結構うだつたりして」

璃南

「ナイト（怒）もつと氷で冷やそうか？」

ナイト

「あーー今…（ナイトつべ…／＼＼）」

璃南

「ん？？何？？」

ナイト

「何でも無い。」

馬鹿話をしたら行き成つ（バタンッ））といつ音がした。

マコト

「おこ…歌怨…びひつた…」

船橋

「腕が黒くなつてゐるわい…」

マコト

「大変だ… 毒が体に回ってるぞ…」

璃南

「マコト先生…」のせてください…医療しまやすので…」

マコト

「出来るのか!?」

璃南

「任せて下さい これでも私は死者を甦らせれ増したし、」

そういふと先生が歌怨を私の前に運んだ。

そのまま左腕にチャクラを集中させた。

私の気持ちに反応したのか…氷が歌怨の額近くに執着し始めた。

マコト

「助かるのか…？？」

璃南

「はい。今の所、毒は少しづつだけど収まっています。  
それに氷で頭を冷やしてから早くすれば明日の朝までには治るはず…」

ナイト

「お前、いろんな意味ですげえーな WWW」

璃南

「あ、、ありがと？」

ナイト

「素直に喜べよ」

璃南

「いやー WWW” いろんな意味で” つてどんな意味? って思つて…」

「

ナイト

「天然だな(笑)」

璃南

「ちよつと笑わないでよー（泣）」

ナイト

「だつてなーwww」

そんなやりとりをマコト先生が呆れ顔で見ていた共知らずに私達は  
楽しんでいた。

## 004\* 初めての任務はBランク！？+後編+（前書き）

雪の国・雲隠れの里まで無事に船橋さんを届ける事になった私達。

忍術学校を出て間もないのに初日からBランクという上忍・中忍レベルの長難闘任務でもあった。

そんな矢先に・・・イチガロー ポレクションの忍びだと思われる奴らに狙われた。

そして、無事ナイト・歌怨・マコト先生のおかげでもあって私達は何とか脱走したものの、森の中で歌怨が倒れた。

医療忍者でもある私は7人で十分そうなテントで歌怨を治す事に。

そしてマコト先生の幻術で私達は一晩無事に過ごせれる者..

004\* 初めての任務はロマンスク!!? +後編+

ナイト

「歌怨・・・治つてゐるか?」

璃南

「もうじき・・・日も暮れるしごよ

ナイト

「へへひ・・・せつか

璃南

「休まないの?」

ナイト

「同じスリーマンセルの奴が倒れてんのに休めれるかよ

璃南

「・・・優しいね」

ナイト  
「そうか？」

璃南

「つい最近まで私達は喋っていなかつたのにね・・・」

マコト  
「そうだな」

2人

「――?」

マコト

「だが。その経験はこの第11班の戦力にもなるの、知つてたか?」

ナイト

「どういう事だよ・・・」

マコト

「簡単な話だ。劉冬眼を使う璃南に。写輪眼を使い、雷を身に纏う歌怨に、片手で印を結び、血継限界でもあるナイト。俺達4人が力を合わせれば出来ない事は無い」

ナイト

「たまにはカツコイイ事を言つね~」

璃南

「流石は上忍・・・だね」

その時だった。

歌怨が頭を抑えながら起きました。

歌怨

「……？」

琉璃南

私はすごく嬉しくて思わず抱きついた。

歌怨

ナイト

「璃南の奴。一晩お前に付きつ切りで看病をしてたんだぜ（二カツ）」

「なんじやなんじや。騒がしいのおー」

船橋

۲۷۱

「船橋さん。歌怨が復帰しました。

「これで出発出来ます」

歌怨

「璃南、すまなかつたな」

歌怨

「璃南、すまなかつたな」

璃南

「うん。私達同じスリーマンセルですよ」

ナイト

「だな」

ナイトが拳を作りながら前に出した。

ナイト

「お前、もうやれよ（一カ）」

歌怨もやつた所で私もやつた。

マニマ

「おー。俺も漏せろ。船橋さんもやりますよー！！」

船橋

一  
あ  
あ  
「

七八

!

「「ああーーーはーーー」」

そして · · ·

私達は雪が積もる中、敵に見つからぬのかと心配な気持ちを抑えながら歩いた。

船橋

「あやじぢやーー晝の國せーー」

ナイト

「…………（（云々）」

۲۷۴

—お前達、氣をひいて繋ねる

「はい／ああ」

《劉文忠公集》

さうだからどうも嫌な予感しかしないんだよね・・・。

琉璃南

「マト先生……トランプが……」

あるとナイトヒマト先生がクナイを出した。

ナイト

「だらうな。めんどくさい

「せつせつせ。流石は忍者じゃ」

？？？

歌怨

「この声は……？」

船橋

「・・・イチガじゃ……」

ナイト

「おこ……糞じじー……隠れてねえーでやつせと出でやがれ

？？

「糞じじこじや」とへ。

やつぱつた途端、雪の中から一〇忍せどの中忍だと思われる忍者が  
出て来た。

その後、田ひげのおじさんが後ろから現れた。

イチガ

「おひめへ。去えへるのー」

ナイト

「勝手だまつてへ。糞じじー」

イチガ

「ガキが。今の内に世話をこへる」

キャラがー！！！

ナイト

「悪いけど俺ら任務中でな」

「マコト、『アリヤー中隊』が一人・・・という所だな。お前たち、いけるか？」

## 歌怨

「行けるかもな。璃南は余り舟橋さんから離れるな」

南 璞

そしてイチガという人が腕を下ろした時、忍者達が一気にやつて來た。

だけど歌怨・ナイト・マコト先生達にそれぞれ三忍の忍者がいて、  
こつちには4忍もいる。

殴らうとしても交互に氷と水が盾となつて船橋さんと私を守つてい  
た。

2

「何だこれは！？！」

璃南

「船橋さん！絶対私から離れないで下さい！？」

船橋

「ああ。。」

璃南

「ありがとうございます、水遁・簾縛水！？」

すると雪の中から水が出て来ては4忍の忍者を捕らえ始めた。

璃南

「悪いけど・・・はあつっ・・・・！」

そういうと、四人の忍者らは血まみれとなつて消えた。

船橋（啞然）

璃南

「船橋さん、すみません・・・  
貴方を守る為なので・・・」

するとマコト先生も歌怨もナイトも中忍レベルの忍者達を倒した。

船橋

「イチガー！何故わしを狙うんじゃ！――！」

イチガ

「何故だと？それはお前が憎にかかる（アサツ）」

その途中、マコト先生がどめを差した。

۲۷۱

憎い  
・  
・  
・  
か。

歌怨

「終わつた、のか？」

ナイト

「ヤツフー！！！」

船橋

「終わった、 、 、 んじゃな——！——！」

۲۷۱

「ああ。お前達もよく頑張ったな。中忍にあそこまで刃向かうとはなー…」「…」

琉璃南

一  
は  
し

ナイト

「どうなるかと思ったぜ」

歌怨

「最終的には船橋さんが無事でなによりだ」

۲۷۴

＝そして……帰り道・船橋さんを無事に送り届け……＝

歌怨

「どうなるかと思ったが… 無事に終わつたな」

ナイト  
「だな」

۲۷۴

「こしてもお前達は強いな。今の所、順調に成長してこるのはー…

琉璃閣

「やつたーー！！！ナイトより成長してるー

ナイト

「ええ＝俺じやないのかよつーーー？」

「璃南だな。歌怨が次だな」

## 歌怨 「フンツ」

ナイト

「何でーー！！！（ガビーン」

雪の積もる道のりで…私達の笑い声がこの雷の国で響渡っていた。

005\* 我愛羅ー！？（前書き）

初めての任務が終わり、今度は修行に励む三忍は・・・

005\* 我愛羅ーーー?

マコト

「マスターが早いな。それに二忍とも、体術・幻術・忍術もきちんと上昇してゐるな」

ナイト

「絶対負けられないしな」

あれから…Bランクの任務が終わって数週間。

私達はいろんな任務をこなして來た。

時にはCランクもやつたり…Dランクもやつたり…Bランクはもう一度やつて…一日に2回ぐらには任務に出かけたまでだった。

そして…私達は腕を擧げる為”幻術・体術・忍術”の特訓をしていく。

マコト

「初日に比べて良く腕を上げてるなー」

# ナイト

「四六二一」

歌怨

「まだまだ行けるな」

玻璃南

二  
一

マコト（あれは…もうこんな時期か…）  
「あー、悪いが俺は用が出来た。ことで解散」

そういう、マコト先生はどうに行っちゃった…

瑣南

「ねえ、木の葉でも回らない？？ついでにお餅とか食べたり」

ナ  
イ  
ト

「いいかもな修行後の餅はサイコうだ

歌怨

「悪いが俺はm( )」歌怨がいないとスリーマンセルの意味が無い

「おやじさん」

私は一人の腕を掴んで歩きだした。

卷之三

「あー！！ あそこのお餅屋さんなんひとう？？」

ナイト

「おつ！ 行こう！」

歌怨

「おこ・；・；・」

看板に誘われて角を曲がった時、足が止まつた。

サスケ

「へえ、砂漠の我愛羅ね〜」

「我愛羅  
俺達は行く……………！？」「

ナイト

「何だアイツ、あの醜当てからじて砂の奴らだよな」

歌怨

「ああ

璃南

「ナルト、何してゐるの〜?」

私は歩きながらナルトの名を口にした。

サクラ

「あつ、璃南……ちよつと聞いてよ…」

ナルト

「璃南姉ちゃん…」

木の葉丸

「ナルト兄ちやん…弱すんなー…」「ムーー。」

璃南

「ちよつと一人ずつ言つてよ…」

そう言つた時だつた。

冷たい視線に気付いて、そつちの方を見ると我愛羅が私を見ていた。

サクラから事情を聞いて、私は三忍に向き直つた。

璃南

「木の葉丸君がぶつかつた事は謝ります。  
だけど…中忍試験前に殺すようなそんな真似をすれば確実に貴方達  
は一生下忍のまま。  
だから大人しくこの場から離れて下さい」

テマリ

「…………

カンクロウ（良い奴じゃん・・・//）

我愛羅

「……ああ。そのつもりだ。悪かつたな。… 璃南」

そつこいつと我愛羅達は消え去つた。

だけ……心ひして我愛羅は最後に私の名前を……口にしたの……

あの時……我愛羅は……

ナルト

「璃南姉ちゃん……中忍試験ついでに何ばよ？？？」

璃南

「下忍から中忍に上がるテストのような者だよ。もつ少ししたら中忍試験が行われるの。それで各地から中忍候補の者がこの木の葉にやつてくるの」

ナイト

「だけど何で璃南が知ってるんだ？？」

歌怨

「ここの間、マコト先生が言つてただろ」

ナイト

「やうだっけ？」

璃南

「その時、ナイト負傷で聞いてなかつただけだと思つて」

ナイト

「何だソレ」

『時は過ぎて… 中忍試験当日』

ナルト達も中忍試験に出る事となり、私も張り切っていた。

(すみません… 璃南 莉奈に変更です)

莉奈

「ナルトー、私先行つてるー」

ナルト

「了解だつてばよ」

印を結ぶと、風と共に消えた。

006\* 第一回目のテストは筆記…?（前書き）

何とか中忍試験の志願書を出す為に忍術学校に入った者の…

## 006\* 第一回の四回のテストは筆記…?

莉奈

「始まるね～。確か301だっけ」

ナイト

「おう。・・・って何やつてんだ? アイツら」

歌怨

「・・・ただの幻術に過ぎない。先に行くぞ」

莉奈

「了解。ナイト、行くよ～」

ナイト

「あっ、おこいでよ! ! ! !」

私達は幻術で止まってる候補者達を見て、何も無かったように上の階に上がる。

中忍試験の本会場でもある301号室前でマコト先生が出迎えてくれた。

莉奈

「あつ。マコト先生」

マコト

「ほう。上忍の幻術を見破つてここまで来たんだな。  
関心関心。流石は俺の教え子だ」

ナイト

「んで。先生は何をしに来たんだ??」

マコト

「志願書を持つて來たな。それを貰いに來たんだ」

志願書を渡すと先生は微笑ましい笑顔を見せながら私達を送りだした。

中に入った途端・・・沢山の視線を浴びた。

莉奈

「無視（）前の方に座ろうよ。うん。決まり」

どうせ何かを言われる前に私は一人の腕を掴んで中間ぐらいの席に

座つた。

莉奈

「…………やつぱ他の席に」（「何だよーーお前ーー酷いじゃん  
ーーーーー何でいんの。 。 。 」

皆さん。お分かりでしょつか。最後の”じゃん”で。

砂の三忍組がいたコトに気付かなかつた私…。

だけど\*力\*我\*テ\*つて感じだから良いんだけどさ…隣が我愛羅  
じゃないからや…

こつ見えても私。まだ我愛羅が少しだけ好き…だけど、認めたくな  
い自分もこるところか…

歌怨

「まア良いだね。もつ席は空いて無いようだしな」

とこつ事で\*歌\*ナ\*莉\*力……とこつ順番に。

はア・・・。今日は付いてないかも

そしてさつやから溜息連発中。

カンクロウ

「お前・・・やつらから離こじやん?」

莉奈

「人生山アリ谷アリとかよく言うでしょ？それと同じ

ナと歌（出たよ。莉奈の嘘作戦）

通用すると思ってたけど逆効果だった。

反対に頬を抓られた。

莉奈

「はなひえ！……ばひやばひや！……（離せ！……馬鹿馬鹿！……）

L

II IN 4 分後 II

莉奈

「痛つーい（泣）何すんのやーーー！」

カンクロウ

「こっちは傷ついてるじやん」

莉奈

「知らないよ。 そんなの」

私は両頬を両手で抑えながら涙堪えていた。

ナイト

「大丈夫か？」

莉奈

「大丈夫じゃない。 場所変わって」

ナイト

「はつ！？」

そういう事で私とナイトが入れ替わり… カンクロウとテマリが入れ替わった… 何故に！？

テマリ

(結構良い男が一人もいるじゃない／＼／)

ナイト

(女つて莉奈以外皆同じだ)

案外可哀想なナイトだったけど・・・その途中ナルトの大声によつて我に帰つた私

これから先の事を考えすぎて自分の世界に入つてた私www

ナルト

「俺の名はうずまきナルトだッ！！！ いずれ火影の名を受け継ぐ男  
だつてばよーーー！」

莉奈

「ボソ）あの馬鹿。一気に敵が増えちゃつてるよ・・・  
ナルトらしくて良いけどね（（えw」

歌怨

「だな」

サスケ

「ついでに天野莉奈についても調べてくれ」

カブト

「ああ。……彼女のチームには音殺歌怨に闇夜ナイト。同僚の天  
野マコト。

今分かるのはそれだけだ。全てが不明になつてゐるよ」

ナルト

「流石は莉奈姉ちゃんだつてばよ」

それから……第一回目の筆記テストが始まった。

莉（暗号……）うなるんだね……）

と、真剣にやつしると黙り込む。集中出来ない。

隣が隣だから

隣はなんと……カンクロウなんだよね……。

ますますついてない私。

だけど斜め前には我愛羅がいてその前にはナイト。

私の斜め後ろ左には歌怨とテマリが座っている。

確か力ソニーニングをすれば、失格か持ち点から引かれる……。

だけどこんな問題、ナイトはほぼ解けないはず。

この間《筆記テストはお断りッ！……》とか言ってたし……それだからナルトも解けないはず。

どうにかしてでも私達三忍の持ち点を減らさせない方法……。

『忍者は裏の裏を読むべし』

裏の裏って何！？

裏…裏…

『忍者「りしべ』

忍者：

『裏の裏を読む』

・・・成程。そういう事ね。

『劉冬眼』

『ナイト。歌怨』

ナ『何やつてんだよ(汗)』

歌『忍者は裏の裏を読むべし。だろ?』

莉『そういう事。私が答えを書つかう。書いて』

ナ『流石は莉奈だな』

歌『頼む』

莉『了解。まず一問目はー……』

そりして…

ナ『解けた!! サンキュー、莉奈。歌怨』

歌『礼なら莉奈にするべきだ。何としてもこの試験は突破するぞ』

莉『了解』

ナ『勿論だ』

そして無事、第一試験・筆記テストも無事に終わり第一試験管の後に着く私達。

『死の森・前』

ナルト

「すげー・・・」

アン」「  
「」は通称・死の森よ。第二試験は「」の森で五日間を廻して算  
うわ。  
その目的は天地両方の巻物を灯台に忍びで持つてくるのよ」

そして一日解散となり、、、次の日。

歌怨

「早いな。誰が持つか?」

莉奈

「」は…意外性No.1のナイトにする?」

ナイト  
「はい?」

歌怨

「良いかもな。巻物を頼むな」

ナイト

「おこ……およこ待てよ……」

と、私達はそのまま巻物を貰いに行つた。

ナイト《成程。そういう事か》

莉奈

「あっ、今の所空いているのは44番だね

ナイト

「マジで巻物誰か持てよ~」

歌怨

「無視すんな(怒)

ナイト

「無視すんな(怒)

莉奈

「まあまあ(笑)ナイトが持つてたほうがいい感じではす、」  
かるよ。(本当は私が持つてるけどね)」

歌怨

「とりあえず、灯台に近い場所に向かうぞ」

二人

「ラジヤー」

移動中、私が何かの気配に気がついた。

『誰かいるよ。後ろから来るよ』

『変わり身だな』

【変わり身の術】

私達は樹木を超えるとその影に隠れた。

影使いでもある歌怨が幻術で見破られないようにしてくれたんだ。

そして私達の分身が誰かに襲われた。そしてクナイで殺された……が……

( (ボオオオオオンッ

男

「チツ。ビリに逃げやがったーーーー！」

ナイト

「ひでえーやり方だなー」

男2

「チツ。地の巻物を持つてんのかあ！？」

莉奈

「持つてない…って言つたらどうするの？」

男3

「殺すまでだッーーーー！」

＝飛ばして…灯台＝

上忍

「ただいまのタイム・・・10分25秒29・・・です」

歌怨

「案外早く終わつたな」

ナイト

「だな」

上忍

「天と地の巻物。両方持つてゐるな。後は好きにしてもいいぞ。第三試験会場にも向かつても宜しい」

莉奈

「いえ。弟達の手伝いに行きます」

ナイト

「何なんだよ！…毎回毎回！…待つてくれよ！…」

とかいいつつも先に行くナイトつて……

## 007\*大蛇丸、現る！？（前書き）

早くも天地両方の巻物を、獲得し灯台に急ぐ莉奈達。

一番のりで10分25秒29という在り得ないタイムで第一試験を終わらせた。

そして、ナルト達の元に急ぐ三兄弟であった。

007\* 大蛇丸、現る！？

莉奈\*（何なの・・・さつきからこの嫌な気配は・・・）

ナイト

「おい莉奈。どうしたんだよ。そんなに急いで・・・」

歌怨

「何があつたのか？」

莉奈

「分からぬい・・・でも嫌な予感がするの・・・」

【劉冬/跟】

サクラ

『サスケ君！・・・しつかり！？』

これは・・?

莉奈

「音隠れ?・・違つ。あのじやない・・じやあ誰?」

???

『サスケ君は必ず私を必要とするわ』

莉奈

「・・・まさか・・・」

だけど・・・アンコさんが確か・・・確認したはず。

アイツが・・・大蛇丸がいるはずは無い・・。

歌怨

「どうだ?」

莉奈

「もしかしたら、 、 、 大蛇丸がこの試験・・いや・・・この死の森  
にいる！・！」

ナイト

「はあっ！？」

莉奈

「サスケに呪印が付けられた。 急ぐしか無いよ。  
もしかしたらあの呪印が暴走しかねないよ！・！」

歌怨

「ああ。 急げぞ」

ナイト

「糞・・・」

莉奈

「私さ。 いつの為に新技を考えたのー。」

ナイト

「新技?」

莉奈

「名付けて。超高速なんだよ。ちなみに私の忍法」

歌怨

「試す価値はあつそうだな」

莉奈

「行くよ。莉奈忍法・桜蘭走權! ! !」

まるで逃げ足が速い鷺のようにな。

すると、二忍法の足元が風のよひに速く走れるよひになつた。

ナイト

「おっ！…見えて来たぞ！…！」

莉奈

「あつ！…あれって音隠れの奴らじょん！…！」

私は速度を上げて、リーさんがやられそうになつた時、痩せ細つた奴を蹴り飛ばした。

サクラ

「り・・莉奈っ！…！」

ナイト

「お前ヤー…弱すぎだろ？」

莉奈

「ちょっとナイト！…サクラだつて頑張つたんだからそういう事

を言つちや黙田でしょ」

ナイト

「お前もやう思わねえーか?」

歌怨

「ただ単にお前が馬鹿で強いだけだ。」

莉奈

「歌怨に一票ーーー。」

ナイト

「うわー。ひつでーー」

サクラ

「・・・私だつて・・・」

ナイト

「・・・まあお前もアイツらの為にも頑張ったんじゃねーの。  
そこまでして、守りたかった。そこは認めてやるよ」

莉奈

「素直じゃないね」

ナイト

「うるせえー！」

サクラ

「／＼＼＼＼＼＼＼＼

歌怨

「それより、敵を怒らせてるみたいだぞ

ザク

「糞女め・俺を蹴り飛ばしがつて・・・

莉奈

「あつ、私？」

キン

「何なのよーー。」

莉奈

「普通の木の葉の忍びだけど?」

ナイト

「噛み合ってねえーよーー。」

莉奈

「そつへーまあーいいや。私、三人の医療するから後はよひしへー」

歌怨

「まあ良いだね!」

ドス

「キン！…あの女を捕らえろ！…」

キンという人が高速で向かつたらしいけどナイトが片足で蹴り上げ、見事に樹木にぶつかった。

ナイト

「ここから先は行かせねーぞ」

歌怨

「まあ行かない方が身の為かもな

ドス

「…・2VS3。これじゃー、そっちが不利だな」

歌怨

「力ではどうやら」つちが上だな

莉奈

「サクラも治療するから横になつて」

サクラ

「いいの？？行かなくて・・・」

莉奈

「大丈夫。あの二人は強いよ。あの一人なら・・・」

【影分身の術】

莉奈

「よし。これで三人に分ければすぐ治るよ」

サクラ

「私つて・・・本当に弱いね・・・」

莉奈

「そんな事無い。サクラは・・強いよ。」

サクラ

「だつて・・大蛇丸にだつて・・・」

莉奈

「ナイトが言つてた”弱い”はね・・・サクラがグジグジしてるからだと思うの。

人にばかり頼つて、いつかはその人達も倒れて最終的には死ぬ。力無い者は殺され、力ある者は上に立つて行く。

だけど、サクラはリーさんが倒れて、ナルトもサスケも負傷で・・・

サクラは命賭けで一人を守つた。  
良い事だと思うよ。ナイトだつて”そこは認めてやる”って言つてくれたでしょ？

だから自分を信じて。必ずその願いは叶うから

サクラ

「・・・うんッ・・・ありがと・・・」

だけど、二人が心配。

歌怨

「雷遁・豪電柱！－！」

すると上からこゝつもの稻妻がドスとキンの体にめがけた。

キン

「ゲホッ・・」

ナイト

「チツ。足が速えー奴だぜ」

ザクという人がナイトの周りを風のように走りながら音波を撒き散らしていた。

ナイト

「糞うぜえー。てか何だよ。この音波」

莉奈

「ナイト！――タイミングを計つて火遁を使って！――」

ナイト

「・・・了解。」

ナイト（1・2・3）

「火遁・炎導豪炎の術！――！」

すると、一気に炎がザクという人に飛び散った。

莉奈

「よし」

その時だつた。サスケに掛かつてた呪印が・・・発動した。

「「キヤー――！」」

思わず、吹き飛ばされそうになる私とサクラ。

それに、ナルトも苦しそうにもがき始めた。

私はナルトの元に急ぎ、抱き抱えて木の上に行つた。

莉奈

「ナルト！ナルト！…しつかり！…」

ナイト

「完璧に氣絶してやがる」

歌怨

「どうする。このままだと、サスケはアイツらを倒しかねないぞ」

莉奈

「だけじゃ、サスケを止める事が出来るのは・・・」

「…ナルト…と…

ナイト

「だけじゃないんだよ…」ハイツ（ナルト）は氣絶して立たない。

歌怨

「…どうせ元も…」

その時だった。

サクラがサスケに抱きついていた。

まだ、治療中でサクラだつて立つのがやつとのばず、なのにサクラは立つて、サスケを止めた。

その光景を見ていたいのは物凄く嫉妬していた事だろう。

w

いの

「サスケ君に泣きながら抱きつくなんて…やるわね^言^」

サクラ

「フンッ。アンタなんかにサスケ君は譲らないわよ♪  
」

莉奈

「いの……変な事を話してないで切る事に集中しなさいよ……」

いの

「はあ……」

サクラ

「（（（ヤマト）））

いの

「（（（イリナシ）））

サクラ

「（（（

今やつとは見なかつた事にしようつかな……

＝HZ次の日＝

ナイト

「あー…暇すぎだぜー…」

私たちは確かに早く終わつたけど、最後まで上忍の話を聞いていなかつた為…今日はもう中忍試験合格発表場に行く事となつた。

そして今は…長つたらしい廊下を歩いてる所。

私の頭の中にはナルトの事だらけ…

「無事に地の巻物を取れたかなー…」とか「巻物は開けてないよね?  
??？」とかとかツー！！！

莉奈

「はああー…」

歌怨

「…どうした?」

莉奈

「…何でも無い…」

本会場に入ろうとした時だつた……

前から我愛羅達が通つて來た。

通つて來た……とこつよつ、通らうとしていた。

だけど私を見る我愛羅の目が本当に冷たかつた……。

その場を我愛羅が通り過ぎて行つた。

(やつぱり私なんか……綺麗やつぱりに並ぶれちやつたのかな……それなら、あの日……マコト先生との修行が終わつて三人でお餅を食べに行こうとして、再開したあの日……我愛羅は確かに小声だつたかも知れないけどちやんと「『莉奈』」「つて……じやあ……なんで……」

ナイト

「まあーいいや。行いつぜ」

中に入るなり……途端に声が鳴り響いた。

??

「か～お～ん～く～ん！～～～（（抱き付く

？？

「ナイト君ー！～～逢いたかつたよー～～～」

ナイト

「火遁・錘艶聞の術！～～！」

解説！～

火遁・錘艶聞の術は…

霞炎舞の術と似て、印を組み、口から霧状の物質を吐いて（砂とか石？）相手を攻撃する。

ナイト得意の錘艶聞の術で一人がもつとも嫌がっている鈴鹿達を蹴散らした。

？？

「何するのよ？ー～～！」

こつちは狐目鈴鹿。（きつねめ・すずか）  
歌怨が大・大・大好きな取巻きの一人。

実力は忍術学校時・ナルトよりも下だった。（今回、生きてる事が奇跡…www）

? ?

「でもそんな所がかっこいい！…」

そして駁靈結羽袈  
まだらめ・ゆうか

ナノが世界一で大好きだといふ  
紹介は…これぐらいかな？W

(名前)

「それじゃ……邪魔者は消えるね」

満面の笑みをしながら、私は一人をおいて窓から飛び降りた。（下  
はコンクリート……）

ナイト

「キメえーんだよッ！！！近づくな！！！ブスッ！！！」

結羽架

「ええ～！～！  
(涙目)

II IN 莉奈は II

莉奈

「んーーーーー 風が気持ちいーーーーー！」

私はこの灯台の屋上に来ていた。

確かに一人の邪魔はしない方が良さそつだつたし… 我愛羅の事でも少し考えたかったし…。

『我愛羅ツヽ』

『

『なあに？』

『大好きツヽ

』

『チユツヽヽ』

『／＼／＼／＼／＼』

今でも甦るあの昔の頃の光景…

あの頃の我愛羅は本当に……

莉奈

「ボソ） 可愛くて優しかったのに…」

? ?

「優しい…良い言葉じやん?」

「莉奈、どう思ふ？」

『ガタンッ！！！』

私は吃驚しすぎて、近くのパイプに腰を打つた。

莉奈

「痛つ——い（泣）—————  
何なの—————！——脅かして—————」

カンクロウ

「悪戯は全く無いじゃんw

通りかかつたらいた・みたいな? W-

( )

莉奈（本当、陰が薄いんだからーーー）  
「そりいえば…我愛羅とどんな関係？」

カンクロウ

「兄弟」

莉奈

「はあつ！ーーー？兄弟！ーーー？似てなツーーー！」

カンクロウ

「似てないとか言われると傷つくじゃん？」

莉奈

「大丈夫。カンクトロウは心の広い人だからwww」

カンクロウ

「…（ブチッ。

カラス^言^」

莉奈

カシケロウ

莉奈

「（純感　じやん）」

そんなカソクロウの行動が気になりつつも、逢えて無かつたかのように見過ぎた私。

放送

『第一試験終了致しましたので、お集まり下さい』

莉奈

「もつ……？……まあ第二試験も頑張ろッ」

私が走り出そうとした時だった。

「あのやー…」振り返ると顔を真っ赤にしながら、呼び止めていた。

カンクロウ

莉奈

うん!!じめあー、後でね^\_^

その後のカンクロウはといふと……。

カンクロウ

(俺の馬鹿ッ！－アホ－！－何やつちやつてんだよー！－！－)

と、自分の頭を叩いていた。

莉奈

「到着」

?  
?

「莉奈姉ちゃん！」

と、言いながら誰かが抱きついて來た。

莉奈

「ナルトー・・第一試験、クリアしたんだねへへ」

ナルト

「その通りっー！－姉ちゃんが最初？」

莉奈

「うん^ ^ 一田田に終わったよ~」

サクラ

「ええー！－私達なんかついさつきだよ（哀）」

莉奈

「そ、うなんだwでも、それだけ巻物取りに時間が掛かつたんだね・・

・ w」

その時、私は何かを察知した。

誰かが私を見ている…。

でも、誰が？

この冷たい手つき…覚えてる…まさか…

トントン

莉奈

「……」

マコト

「どうした？ 莉奈？ そんな顔をして」

莉奈

「マコト先生……」

マコト

「？？？」

莉奈

「何でも無いです……」

\* 008 \* 幻覚

莉菜

「あいつと何かの幻覚…うん…幻覚だつー！」

と、私は蹲つて呪いの呪文のように唱えていた。

ナイト

「はあ？ 何が幻覚なんだ？」

莉菜

「あー… もうー… 最近、目が可笑しいよー（泣）」

ナイト

「はあ？」

と、ナイトは何がなんだかわっぽり分からぬ様子だった。

莉菜

「もう駄目ー頭が回らないー！」

と、嘆いていた時、冷たい視線が向けられてる事に気付いた。

視線の先を見ると、腕を組みながら壁に寄り掛かりこちらを見る我愛羅がいた。

莉菜

「あーーー（泣）我愛羅とだけは戦いたくない…」

歌怨

「あいつと当たるだらう！」

と、地獄耳でもある歌怨が即答で言い返して来た。

莉菜

「100%？」

歌怨

「100%」

莉菜

「だから即答しないでよー（泣）」

マヒト

「莉菜。大丈夫だ。お前なら、出来る。そりだら？」

ナイト

「おい…マコト。ちにうとズレてるや（呆」

歌怨

「ナイトに同感だ」

マコト

「まあ…お前なら、きっと中忍になれる。大丈夫だ。自分に自信を持つんだ。

何たつて俺の教え子だろ?」の俺がついてる限り、お前達は絶対に中忍になれる」

と、言ってまさかこの言葉が本当に現実となつて、証明されるとは誰もが思わなかつただろう…。

そして一回戦目はサスケの勝ちで勝負は次第に進み、9回戦目に突入した。

九回戦目、ナルト対キバの戦いとなつた。

「んー…ナルト、だね。勝つの」

リー

「そんなの分からぬですよ…戦つてみないと…」

ナイト

「コイツ（莉菜）の運は良く当たるんだよ。  
100%中99？はな。外した事すら、余りねえーから、ナルトの  
勝ちなんじゃねーの？」

リー

「そんな…」

ヒナタ

「ナルト君…キバ君…」

そして、さつきから嫌な気配がするけど、誰だかはもう百発百中で  
分かる。

絶対に…この木の葉に、大蛇丸がいる。

だけど他の人達は気付いてない様子…マコト先生や、三代目火影様  
までも…。

ここは、様子を見るしかないかな…。

(飛ばします^ ^)

残るメンバーは、私と歌怨とナイトと、リーさんとチョウジ。

それに、我愛羅と音隠れが一人。岩隠れが一人で、草隠れが一人残っていた。

私的には、我愛羅と音隠れの人とだけは戦いたくないかな…。

我愛羅は…流石に、戦えないし…音隠れの人は、ナルトたちを襲つた張本人でもあり、見る限り大蛇丸の部下だというね…。

だからといって、岩隠れの人と草隠れの人が弱いとかそういうのじやないんだよね…。

あれこれと考えてる内に電腦掲示板には名前が映し出された。

途端には大声で叫びそうにもなった程だった。

【アマノ・リナ／サタケ・ユウ】

莉菜

「何で！？？」

ナイト

「仕方ねえーだろ。まあ、わっせと行けよ」

マコト

「大丈夫だ。いざとなれば、助けに行くから」

いや、別にそこまで弱くはないかな？

そう想いながら、私は何メートルもある高さから飛び降りた。

着地の際には、少し水が庇つてくれた痛みも和らいだ。

カンクロウ

「お手並み拝見と、行くか」

ナルト

「姉ちゃん……頑張れっ……！」

私が笑顔で応えると共に、審判が笛を鳴らした。

ユウ：「俺はユウ。テメエを倒して中忍になつてやる」

莉菜：「アハハ^\_^ ; ; ;まあ、私も中忍になりたい訳ですしね……」

と、言つとクナイが飛んできた……が、軽々と水が底い、クナイを破壊した。

ユウ：「土遁・泥胞子!-!」

下忍で土遁を!-?しかも、上忍レベルの!-?

と、思いながらも水・氷が守り跡形も無く土が負けた。

ユウ

「想定外だな……貴様は血縁限界の者か?!」

莉菜

「んー…ちょっと違うかな。私は血継限界なんかじゃないよ。  
私のチームメイトにならうけどね^\_^まあ、今度はいつしかりや  
らせて貰うね」

印を素早く結び、口にした。

莉菜

「沸遁きりえい…霧冰獄いごく」

すると一気に私達の周りが、白い霧に包まれた。

あつと二階からまじりに誰がいるのか分かるぐらいい、霧は薄い。

だけど、印を結ぶ事に霧が濃くなつていぐ。

そして後に、攻めて攻撃をするというのが今回の作戦。

莉菜

「水化の術!—!—!

すると、敵の周りに一~三体の私の水分身が現れた。

相手は気付いてない様子。それどころか、視界が見えなくて困っている様子だった。

莉菜

「水遁・豪水腕の術！！」

一気に腕に水分を集め、それを敵に向けて発射した。

前後左右からも強烈な水を食らい、おまけに視界がゼロで身動きも取れなく、霧を消し去ると相手は気絶していた。

莉菜

「簡単に終わっちゃった（ボソ）

ハヤテ

「天野莉菜、勝利」

印を組んだ状態で、胸の前に当てるときが水となって消え、その水がマコト先生たちの元に行き、元の姿に戻った。

ナイト

「もつと斬新にやろーぜ？龍駕刀とかさ、使えば良いだろ？」

莉菜

「絶対に駄目だつてば！初代水影様が私に託した大事な刀なんだから！」

ナイト

「んじゃー、いつ使うんだよ」

莉菜

「いつかは必ず使うよ」

そういうと、ナイトに頭を殴られた。

莉菜

「最低ー！！！女の子を殴るなんて！！！」

ナイト

「貰った刀をいつまでも使おうとしねエーからだろーが！！！」

莉菜

「大事な大事な大事な刀なんだよ！？」

歌怨

「五月蠅いぞ。お前ら。そして、ナイト、次だ」

歌怨の言葉に、私とナイトが電腦掲示板を見るとやうに【ナイト  
▽△オダギリ】と書いてあつた。

ナイト

「おっしゃーーー！暴れられるーーー！」

オダギリ

「か…フッ」

上では…。

歌怨

「草と、木ノ葉か…。あれは完全に馬鹿にされてるな」

莉菜

「うん。同感。だけばナイトが勝つやつと愚うんだよね…（こ  
）とはあの額宛は、岩隠れか…」

マコト

「だな…まあウチのナイトが負けるはずは無いしな（（ドヤ

つと、何か草隠れの上忍さんに向かってドヤ顔だつたような…気がするんだけど… www

ナイト

「火遁・炎爆弾の術！…！」

オダギリ

「甘い甘いー…！」

ナイト

「ちょこまかと動きやがつて…」

オダギリ

「付いてこれるか？まあ無理だろうな www」

ナイト

「それは…どうかな？？」

そつ言い、素早い印を結ぶナイト。

莉菜

「ええ？？！まさかのアレを口寄せじゃやつの……？」

ナルト／サクラ／リー

「あれ？／つて？／つてなんですか？？」

歌怨

「だな…。あのオダギリって言ひ草隠れの奴は終わるな」

ナイト

「口寄せの術…狼雷暴！…！」

するとナイトの周りには十数匹の狼が現れた。

オダギリ

「なんだ…あれは…」

ナイト

「狩りの始まりだツー！！！行け！！！」

闇月忍法・豪華水煙？轟！…！」

すると十数匹の狼たちが一斉に、敵の元に向かい、オダギリって言う人は逃げる隙もなく、狼たちに捕られえられ、ナイトの火遁で決

めた。

ナイト

「見たか！俺の狼たちを……」

莉菜

「はいはー。見たよ。早く上って来たら？」

ナイト

「棒読みしやがって……」

そんな頃……反対側にいた、我愛羅たちはといつと……。

テマリ

「あの男も結構やるじゃないか……」

カンクロウ

「任務の邪魔されたら最悪だけどな。まあ、あの女の力も大抵、見  
れた事だしな」

我愛羅はただじっと、冷たい眼差しで誰かを見ていた。

その視線の先には……。

莉菜

「あそこで負けてれば、一樂のラーメン、14人分奢る約束だったのになー」

ナイト

「んだよそれ……ってか俺は見事に、蹴りを付けたじゃんかよ！……めんどくさがりでもな……！」

莉菜

「だからこだだよ……全くもう……確かに一樂つて一つ、650円だよね？それを16×650だから……」

歌怨

「10400円だな。調度小遣いも無くなるみたいだしな。お前に取つては持つて来いの物じゃないのか？」

ナイト

「せつて一嫌だ……つてか、俺の金が……」

カカシ

「ナイト君、奢ってくれるなんて……嬉しいな～」

ナイト

「嫌だ！－！ぜつて－！－！」

という、他の人たちから見れば楽しそうな会話で羨ましいというのもあったかもしない…。

私は分からなかつた……。

びつて我愛羅はあの時……私に……『逃げて』って言つたんだわつ……。

そして人が変わったかのように『君は殺さないから』と言つたあの言葉は…何なの？

それに… どうして再開したあの時、あなたは私の名を口にしたのー

私には分からぬ……貴方が何を考えてるのかも……

ねえ…昔みたいに笑つてよ…。

お母さんが私たちにくれたあのペンダント…私は大事に今でも、肌

身體をあわけてるよ…

だって、君のペンダントは…貴方と私の唯一の繋がりだから…。

009\* 我愛羅の戦い（繪書き）

途中から莉菜 莉那に変更しました

## 009\* 我愛羅の戦い

続いて…今度は歌怨の番だつた。

歌怨は物凄くやる氣が無い…とこりよつ、早々終わらせる所へついた。

おまけに今から戦つ相手の女の子が…すゞこホドホドしぬかう…  
すぐ倒されそうだな…うん。

ナイト

「少しば手加減しろよな?」

歌怨

「帰つて命取りになるだろ」

そう言って歌怨は印を結び、黒い霧とともにアートにてついていった。

ナイト

「何が“帰つて命取りになる”だよ…。」ソラは叫んでやつたの  
によー！」

マコト

「そりだな…って莉菜、何をしているんだ??」

莉菜

「何か…あの子、強い」

私は印を組む状態で目を閉じて、意識を集中させていた。

わざわざからあの子の回りに変な物を感じてたんだよね…。

流石は十尾の力 + チャクラ…それに、天野一族の力。

こんな事までも出来ちゃうんだね…。

ナイト

「どうこいつ意味で強いんだ?」

莉菜

「…歌怨が手加減したら…殺されるに違いない」

ナイト→マコト

「…?…?」

莉菜

「あの子の体の周りに何か変な物が見えたの。今のが”急襲裏紅”という天野一族の術を使って見たの……。そしたら……あの子の周りには死神がいるの。それも一~三体だけじゃない……」

マコト

「なんだとー？？！」

莉菜

「樹影家……」

あの子……もしかしたら……樹影家の子かもしれない……。

ナイト

「樹影？何だそれ？」

莉菜

「話は後。劉冬眼」

続いてナイトも田を閉じて、印を組んだ状態で胸の前に手をやつた。

莉菜

『歌怨…歌怨…』

私の言葉に気付いた歌怨が私たちと同じ事をしていた。

それに気付いたナルト達は不審に思い始めた。

莉菜

『歌怨…手加減無しで戦つのを薦める。

あの子、見かけによらずやばいものを身にまとつてゐるよ……』

歌怨

『やばいものー…………?』

ナイト

『死神らしじーゼ。さつき俺が言つた言葉、選言撤回だ……!』

歌怨

『ああ……つまりは手加減をすれば…命取りになる、ところどとか?』

莉菜

『その通り。あの子は…樹影家の子孫かもしない。…いや、子孫

に違いない。

昔、天野家と樹影家は対立家でもあったの。ちなみにこれも劉冬眼で見た映像ね。

その当時、天野家と樹影家はどちらの家柄が強いか競い合っていたらしいの。

劉冬眼・龍樺眼を開眼させた天野家は、完全有利だったの。

その成果、完全に敗北に近かつた樹影家は家柄のプライドとして…ある恐ろしい計画を考え出したの。それが“死神呪靈”。

死神を召喚させて、相手の懐を付いて命を奪つ…必ず息をしなくさせるぐらに殺し上げる…。

だけど死神呪靈をするには感情を捨てる…という試練があったの。今で言う…霧隠れの“惡習”つて奴だね。劉冬眼で見た限り、生徒同士とかでは無く、一家で殺し合いをする事らしいの…そしてあの子は家族である大切な人たちを殺し、死神呪靈を成功させたに違ない』

私が説明し終わると、歌怨は『輪眼を発動させた。

ナイト

「成程…」

莉菜

「…」の勝負…どうなるかは分からぬかも…」

ナルト

「何が分からぬんだ…？莉菜姉ちゃん…？」

莉菜

「……この勝負の事だよ。……（ボソ）……死者が出なければ私も嬉しいんだけどね……」

ナルト

「？？？」

ナイト

「小声で怖えー事言つくなよ（呆」

ハヤテ

「それでは……勝負を始める……はじめ……！」

その言葉と共に敵の樹影家の子孫でもある女の子の田の色が変わった。

そして性格も変わったかのように、人も変わった。

樹影

「てめー何かひと振りで終わらせてやる……」

そう言い、腰から大きな刀を出し、歌怨に向かつて振り下ろした。

だけど歌怨は雲分身を作り、いろんな場所に移動しては消えた…。

樹影

「ちょこまかと動く糞ハエが…！」

ナイト

「確かに見かけに寄らず…って奴だな…俺、ああいつ奴無理だ^\_^q

^\_

莉菜

「あの歌怨が平然でいられるのも凄い事なんだけどね。。。」

ネジ

「何だ… アイツのチャクラ量は…」

莉菜

「チャクラ？？歌怨の事？？」

ネジ

「いや…違つ…敵の方だ…」

ナイト

「敵？？！」

急襲裏紅をまた使う事になりそつ……

マコト

「莉菜……頼むー。」

そう来ますよね……

莉菜

「 急襲裏紅  
きゅうしゅうじゅうもうじやく  
…………」

同時に劉冬眼を発動させ……見た物は……

樹影と言う人の周りに……砂が沢山巻かれていた。

どういう事ーーーー？

莉菜

「…………まさかーーーー！」

私の勘は何となく当たっていた……反対側の所で……我愛羅の瓢箪から砂が漏れ出していた。

きっと我愛羅は砂を使ってあの樹影つて人の動きを止めよつとしていた。

だけど確か……参戦は駄目なはず……！

ナイト

「なんだよ？」

莉菜

「ナイト……力を貸して……！」

マコト

「何をするんだ！」

莉菜

「……我愛羅を止めないと……あの子が殺される……！」

マコト先生は物凄く驚いていた。

それにナイトは一瞬、驚いていたが、ニヤッと口角を上げて「あ。良いぜ」と言った。

マコト

「だが…参戦は禁止のはずだ…どうせひしめくつだ…」

莉菜

「ナイトの忍術で…カモフラージュすれば…私の水は見破られないはずです」

ナイト

「成程…まあ、任せろ…！闇月一族にしか使えないカモフラージュでアイツ（我愛羅）の砂と戦わせてやるよ（ニヤ）」

莉菜

「勘が鋭いのも良いい事だよね。私、そこまで言つてないんだけどね

…」

ナイト

「まあまあ、行こう…！」

そういうと、私とナイトは田を闊して印を組んだ。

そして組んだまま、胸の前に持つてきて私とナイトは意識を集中させた。

ナイト

「行くぞ、莉菜」

莉菜

「OK……こいつでもよめじへ」

ナイト

「闇月忍法・孔雀惣寿」

莉菜

「（水……）」

その上からナイトの忍法で水と氷は透明になりつつ、砂の刃を止める為近づいていった。

それに気付いた歌怨が、黒い霧を使って霧絨毯きりじゅうたんを作り、地上から見

ていた。

樹影家の手の足を捉えようとしていた砂を、水がドロドロ柔らかくした。

それに気付いたのか、砂の大群が襲ってきた。

それを守るかのように今度は草が地面の中から出現し、包丁で何かを切るかのように呟く消しちぎつていった。

我愛羅：「…………邪魔いやがつて」

テマコ：「？」

莉菜

「（水遁・轟邱？！――）」

やつの心の中で畳えると、砂に水の馬車が追突した。

水に負けた砂が固まって、次第には砂が引き下がって我愛羅の元に戻つていった。

ナイト

「ふう…終わったな」

ゆっくり田を開け、ナイトが笑顔を浮かべながら私の方を向いてきた。

それに続いて私も印を組むのを止め、ナイトと同じ事をしていた。

歌怨

「黒霧落刹！…！」

すると黒い霧の中から雷が、敵に墮ちて見事に意識を失つたらしい。

ハヤテ

「勝者、音殺歌怨！…！」

ナイト

「お。歌怨も勝つたのか」

莉菜

「おめでとう…！」

すると歌怨が照れながら「ありがとう。」と言っていた。

そしてまた次の対戦名が発表された。

(飛ばします^ ^)

虚しくも… チョウジはすぐに勝負が終わって最終戦に入った。

それは… 我愛羅とリーさんの対戦だった。

我愛羅は、砂を使って下に移動していた。

リーさんもやる気満々だったけど、私は心配で行く前にリーさんを呼び止めた。

リー

「…莉菜さん…」

莉菜

「リーさん…危ないと思つたらこの水を飲んでトセ…」

テンテン

「これ、何?」

莉菜

「耳元で））これは、私が作った回復薬です……それに予てこの中には回復・負傷を治す薬でもあるんです！……絶対に我愛羅がリーさんを生きたまま返りやうが無い」と思います！！！」

ですから本当に危ないと思つた時は止むを得ず口飲んでください！」

リー

「は……はーーー！／＼／＼／＼

我愛羅

「まだかッ！ーーー！」

リー

「余り敵を待たせない方がよさそうですね……では、行つてしまります！ーーー！」

そう言い、戻つていくリーさん。

テントン

「何を言つてたの？？」

莉那

「內緒」

「ええ——！——！教えてよ——！——！」

「無理」  
W  
W  
W  
」

そう言いながら歌怨達の元に戻る。勿論私は走ると睨まれそつた気がして水を使って瞬間移動をした。

ナイト

莉那

「何つて？負傷者を出さない運動だけ？」

ナイト

「……はいはい。俺はもうそれ以上言わねーよ」

莉那

「何その呆れた返答！！」

歌怨

「…莉那、試合を見なくても良いのか？」

と、歌怨に言われてナイトへの質問は途中でやめた。

それと同時にハヤテさんが笛を鳴らし、リーさんが得意の体術で突っ走つていった。

だけど…全て、砂の盾で邪魔をされて攻撃どころか我愛羅に触れられない状態だった

リー

「はあッ！…！」

ナルト

「糞ツ…あの砂の盾をなんとかすれば…勝てるのに…」

我愛羅は…あんなに甘いハズが無い。

絶対にリーさんを無事に帰らせるはずが無い。

殺意と憎しみでしか…今はそれしか考えてない…我愛羅の事。

私があの薬を渡したとしてもリーサンは使わない…か、

我愛羅に壊されるか…のどっちかしか無い」と思つ。

仮にもリーサンが飲んだとしても…我愛羅はそれを見て…殺そうとするに違ひない。

まあ、私が蘇らせれば良い話…。

だけどその人を思つているとリーサンが突然、足から変な者を取り始めた。

そんな事を思つているとリーサンが突然、足から変な者を取り始めた。

歌怨

「両方10tもする重りか…」

と、三人してマコト先生の方を見る。

マコト

「なつ…なんだよーーー！」

ナイト

「アイツ（リー）はーーなのに俺らはヨロとか酷すぎじゃねーのか？」

マコト

「…良いんだ。私の教え子だからな…それぐらいの事は…」

莉那

「ただ単に…マコト先生の趣味で付けたんですね~」

マコト

「…！？」

歌怨

「そうなのか…やはりな」

莉那

「うんvvv 劉冬眼で先生の話を聞かせて貰いました」

ナイト

「「こんな上忍、ありかよ」

マコト

「何の事だか…」

歌怨

「“「こんな事まで分かるようになつたとは…危ない危ない”そういう事ですか…」

マコト

「何故私の心の声を？？！」

莉那

「それも私の劉冬眼と歌怨の『『輪眼』』で

「

マコト先生は思つた…。

『「こつらは…危ない』』と。

つて言つつか試合……！

気付くと…リーさんが包帯を取っていた。

リー

「表蓮華——ツ—————！」

（お願い……）私はそつ唱えながら自分の手を握つて祈つていた。

お願い！！

（（（ドッカーンッ！）！

我愛羅は物凄い音を立てて地面に衝突した。

我愛羅は驚いた表情をしていて、体に物凄いヒビが入っていた。

リー

「手応え……あります」

すると横から「よつしゃー————！」といつ声に驚く私。

誰もが喜ぶ中……私は嫌な予感がしてたまらなかつた。

私の勘は当たつた……。

見る見る内に我愛羅の体が砂となつて、割れていった。

リー

「何ーー?」

そう…あれはただの砂の抜け殻だつた。

やつぱり…我愛羅がこんなに簡単にやられるはずがない。

あの時だつて…上忍を…15人程度いた上忍を砂で殺した…。

それと同じように…簡単にやられるはずがないよ…。

するとリーさんの後ろから我愛羅が現れた。

でも…あれは…あの時の我愛羅…。

10年前…我愛羅が夜叉丸さんに殺される数分後に…目覚めたもう一人の我愛羅…。

上忍達を簡単に砂で殺したもう一人の我愛羅…。

そう思うだけで体の力が抜けそうになった。

ナイト

「おい……莉那……大丈夫か?！」

莉那

「……ツ……駄目……」

ナイト

「は?……」

莉那

「リーさんが…殺される…」

歌怨

「どうした?」

そういつた時だった。

我愛羅が不敵な笑みを浮かべて、印を結んだ。

するとリーさんに砂が炸裂した。

今度は砂の海がリーさんを襲った。

駄目だ…助けにいかないと…

歌怨

「何だあれは…」

莉那

「あれは…“流砂瀑流”…」

その技は小さい時、私と我愛羅が一人で考えた技でもあった…。

私は“流水瀑流”我愛羅は“流砂瀑流”

一人で考えた大切な技…なのに我愛羅は…殺しに使おうとしてる…  
どうして…!!

大切な人を守る為の術だつて…あの時、約束したのに！…！

我愛羅：「フツ」

そう不敵な笑みを浮かべ、また印を組み砂で攻撃を仕掛けた。

そしてリーさんは表蓮華の衝動で、避けてガードするのが精一杯だった。

私はハツ！と氣付いた。

確か…試合が始まる前、リーさんに渡したあの薬！…！

すると、テツパイプを握つて叫んだ。

莉那

「リー……りー……ん……！」

リー

「り…な…さん」

我愛羅

- 1 -

莉那

薬——！！！飲んでください！！！！！」

「藥？」

「マリテ」

するとリーアさんが笑みを浮かべ、蓋を開けて飲もうとした時だった。

また我愛羅の砂が邪魔をして、ガラス事、壊された。

予想はしてたけど…」ソリまでやらざると云ふ。

だけどリーサンの方を見ると、いつもの笑顔に戻つていて「ありがとうございましたッ！！！／＼／＼」と会釈しながら言つていた。

莉那

「はあ……良かつた……一滴でも一滴でもそんなに効果は無いけど……時間を費やしてくれるから……やつぱり薬の研究、しといて良かった……」

そんな事を言つても我愛羅の攻撃は止まりはしなかった。

だけど……リーさんが……禁術ともされてる……裏蓮華をやつしていった。

それをリーさんは、開門・休門・生門・傷門・杜門までを開門した。

我愛羅：「なんだとー？」

するとリーさんは俊足で我愛羅をまた蹴り上げた。

歌怨

「上だ……」

リー

「また砂の鎧ですか……それでは来れでどうですか……」

するとリーさんは我愛羅を一人、いるかのように蹴っていた。

それと同時に砂の鎧も徐々に剥がされていった

かなりの距離で砂の盾が上手く追いついていなかつた。

「ソレで決めれば…チャンス…リーさん…！」

۲۰

……………

! . ! . ! . ! . !

その瞬間、物凄い風が巻き起しつた

誰もが終わつた…そう思つてたが、違つた。

瓢箪が砂となり、我愛羅を底つたのだつた。

その成果、リーさんの左腕と足が負傷した。

だが…我愛羅はまだ終わらなかつた。

我愛羅：「砂縛柩！——！」

リー：「うわあああああつツツツ——！」

莉那：「リーさん——！」

そしてまた、砂の大群が、リーさんを襲おうとした時だった。

皆：「！？！？！？」

我愛羅：「なぜだ……！」

私は、我慢しきれず、リーさんの前で元氣にしゃべり、水を守つこして立っていた。

莉那：「我愛羅、もうやめてッ——！」

ナイト／歌怨

「莉那ッ——！」

莉那：「何でツ…何でこんな事するの…？ねえツ！…！」

次第には頬を伝つて大量の涙が溢れてきた。

莉那：「どうして変わっちゃったのツ！…！」

ナルト：「姉ちゃん…」

我愛羅：「……ツ……」

サクラ：「莉那…」

すると我愛羅が頭を抱えて、苦しみ出した。

我愛羅：「何故…何故助ける……」

莉那：「リーさんは……リーさんは…木ノ葉の…大切な仲間なの  
！…！」

我愛羅：「なか…ま…だと…！？」

莉那：「それでも…我愛羅がこれ以上…やるひで無いのなら…私を殺してツ…！」

皆…「…？…？…？」

莉那：「我愛羅はあの時言つてくれた！…！…“認められなくとも良い。だけど大切な仲間を守る”つて！…！…だから私も…大切な仲間を守り通す！…！…！」

我愛羅：「…………」

テマリ：「大切な…仲間？」

バキ：「（我愛羅には…到底、分からないだろうな…）」

すると砂の盾も、瓢箪の中に戻つていった。

そして我愛羅は立つてビニカに向かつていった。

我愛羅：「止めだ…」

莉那：「……ツ……」

ハヤテ：「勝者、我あ…！？」

後ろを振り向くと…意識を失いながらも立っているリーさんがいた。

リーさんは懸命に歩いていた…でも、私の前まで来ると氣を失つて倒れてしまった。

その体を支えて、私はリーさんの体を直し始めた。

医療：「後は」こちらでやります！――

莉那：「はい…」

ナルト：「姉ちゃん！…！」

ナイト：「莉那！…お前、何であの術を使つたんだよ！…！」

リーナの元にナイト、ナルト、ガイ先生が駆けつけた。

莉那：「…………私はだいじょー、ぶ……」

そう言つたつもりでも、私も意識を失つて、ナイトが体を支えててくれた。

ナルト：「姉ちゃん……しつかりしりよ……姉ちゃん！……」

ナイトは、私の体を支えながら、ゆっくりと地面に寝かせようとしていた。

ナイト：「黙つてろ……！」  
ナルト：「おー……闇月……姉ちゃんせびくなつたんだよー。？」

ついに怒つたナイトがナルトの方を睨みながら怒鳴った。

ナイト：「少しそ黙つてろ……！」

それだけ言つと、片手で足を組み、一階のマコト先生達がいるところ

ろに移動をした。

歌怨：「まさか…飛び込むとはな…」

マコト：「莉那が言っていた…あの言葉は…一体…」

ナイト…「…………」

歌怨：「あの日もさうだったよな…中忍試験、前日辺りに餅屋に行こうとした時…俺たちはそこでナルト達の喧嘩に入り込んで…その時、莉那が砂の奴らに向かつて言つた。  
その時もあの砂漠の我愛羅がいた。そして何か小声で言つと莉那は俯いていた」

マコト：「そんな事が…」

ナイト：「…俺のただの勘だと思うんだけどさ…莉那とアイツ、小さい頃とか…出会つて何がが起きた…って事なのかな…？」

サクラ：「？」

カカシ：「どうこいつ事だ？」

ナイト：「余り期待はしない方が良いけど…ずっと前に莉那が言ってたんだ。

“分かつてもらいたい、大切な人がいる”って…。  
それにさつきも“どうして変わったの”と、アイツに問いかけていた。

普通だつたらアイツ（我愛羅）はどんな奴だろーが攻撃をするはずなのに莉那にはしなかった。

それにアイツが使っていた“流砂瀑流”って言う技も知っていた。  
普通ならそこまで知らないはず…なのに莉那は知っていた。それに歌怨の試合の時も砂を草・水・氷を使って歌怨の手助けをしていた

…

009 \* 我愛羅の戦い（後書き）

魔歩です……。

たまにDUSTからやるとモガあります……

文章が短かかったり、途中で区切っていたら「ああ……なるほど……」的な感じで軽くスルーしてください。ww

それでもまたPCで更新する時には「ペリーとかして前の奴に繋げたりしますのでww

## 010\* 我愛羅の行動（前書き）

そして、無事第三の試験・予選も無事に終わり

## 010\* 我愛羅の行動

猿飛：「これから本戦の説明を始める」

ナイト：「莉那？大丈夫か？」

莉那：「何とか…」

あれから、十尾の力も貰つて早く回復をした私だった。

でも、これで中忍になれるんだね…。

猿飛：「本戦は諸君の戦いを本戦で晒す事になる」

その頃…私の分身は、カカシ先生と一緒にサスケの所に向かっていた。

火影様の話は始まる前に、カカシ先生に頼まれて分身を出しておいたんだよね。

ナイトと歌怨は完璧に見破つてゐると思つただけど…マコト先生も上

で見守つてくれてるし。

力カシ：「やはりか…」

莉那：「力カシ先生…」

私と力カシ先生が目を合わせると私の分身が水になり、サスケの元に向かつた。

劉冬：眼で見ていたけど…カブトつて人がサスケを殺しかねない。

( )

莉那：「まさか大蛇丸がサスケを狙うなんて…」

力カシ：「まあ…呪印も付けたの、大蛇丸っぽいしね」

莉那：「……」

( I N 予選会場では)

猿飛：「アンゴが持つてゐる箱の中から一人一枚、取るのじゃ」

え？ 10？？

ナイト：「俺、 12」

歌怨：「15…か」

響：「左から順に教える」

（ ）

莉那：「10です」

ナイト：「12」

歌怨：「15」

？：「11」

?・「13」

?・「16」

猿飛：「これはトーナメントでもあるんだ」

と、言い見せられた紙に…

莉那：「（滝隠れの人か…）」

ナイト：「マジかよ…また草かよ…」

歌怨：「滝か…」

それも私の相手は、物凄そうな刀を持った馬鹿力っぽい人。

ケモリ・ゴウジって言う人だった。

おまけに滝つて…。

つていうか…我愛羅とナルトと同じブロック…。

最悪ツー……！

つて…もし、私が勝つたら…ナルトか、我愛羅と当たるって事?

ナルトは極力避けたいんだよね…。

大事な弟だしさ

草：「質問。スリーマンセルのチーム内で当たる事はありませんよね？」

例えば…砂の人達とか木ノ葉の10・12・15の人たちとか…」

猿飛：「安心せい。当たる事は無いぞい」

ナイト：「おっしゃー……！」

歌怨：「…お前は俺と莉那、どっちと戦いたくないんだ?」

ナイト：「即答」勿論お前だッ！――！」

その後、何でか知らないけどナルトとエビス先生と一緒にお風呂場で修行をする事になつた。

エビス：「まずは足の裏にチャクラを執着させるのです……」

莉那：「……はあ……」

ナルト：「やつてくれないと分からんといつてばよ……」

エビス：「ふむふむ。では、お手本に莉那さん、やってみてください

莉那：「……（何で私が……）」

と、そんな事を思いながらやる氣の無さそうな表情を浮かべて印を胸の前で組んで、目を閉じた。

くくボオオオンッ！――・▽・▽

とこう音を確認するとそのまま御湯を上を歩いていった。

莉那：「これで良いですか？」

エビス：「はいへへ合格です」

ナルト：「ええええええ！…………？ 莉那姉ちゃん、すっぴー？…………？」

そのまま私は近くの手すりに座つて、ナルトの修行を見届ける事にした。

本来なら今はマコト先生達と一緒に焼肉屋さんに行くはずだったのに・・・。

はああああ・・・・。

だけど、そんな事を考えていてもナルトは真剣にコツも掴んでたようだった。

莉那：「仕方ない……やりますか」

ナルト…「おうととととー……ビわあッ……」

ナルトがまた失敗をして、湯の中に落ちそうになつた時、水が底つて助けてあげた。

莉那：「ナルト、良い?ちゃんと聞いててね。

御湯の上を歩くには一定量のチャクラを流し込む。はい、やってみて

て

ナルト：「…………」

莉那：「そう。次に御湯に片方の足を付けて、自分の体重とかでの重さの量を考えて下に流し込む」

ナルト：「ビわああああつ…………」

莉那：「だからーーーーーゅうくじゅうなことやらないと駄目でしょ

!!！」

そう言つた時だつた。

ナルト：「あああああ――――――――――――――――――」

莉那：「？」

エビス：「どこの誰だか知りませんが…ハレンチはこの私が許しませんぞッ――――――――――――――――」

つて、あれ…エビスさん、簡単にやらねかけってる…・・・

ナルト：「やい――――――――お前誰だ――――――！」

?・「良くぞ聞いてくれた――――――わしはガマ仙人じや――――」

ナルト：「せんにん？」

莉那：「伝説の三忍の自来也って人、いるでしょ？その人だよ」

ナルト：「…ふうーん…覚えてない」

そうこうと自来也さんがズロッと地面に顔をぶつけた。

自来也：「こしても君… 可愛いの～？」

片手で印を組む状態で田の前に持つてみると、煙とともに数疋の獣ライオンが出てきた。

莉那：「出来也さん。出来ればナルトの修行の手伝いをしてもらいたませんか？」

見て貰うはずの上忍さんも貴方に倒されかけた訳ですし…」

自来也：「ねー… 任せとけ… （糞… 獣どもめ…）

ナルト：「姉ちゃん、サンキュー…！」

自来也：「姉ちゃん？ お前は姉弟か？」

莉那：「違いますよ。義理の姉弟です。私は天野莉那。 じゅりな…」

ナルト：「つまみきナルトだつてばよ…！」

莉那：「両親が小さい頃、亡くなつて今は私がナルトの面倒を見て

「いぬんですよ」

自来也：「そつか……。」

(浜辺にて)

莉那：「そう！ その調子で水の上に乗つてみて！ ！」

ナルト：「お…おつ…！」

あれから…色々と云々な事があつて、説明したくないぐらこの事が起きた。

それでも自来也さんはナルトと私の修行を見てくれるといふことで今は、ナルトと一緒に水の上で修行をしていた。

莉那：「そう……そのまま歩いてみて……ゆうくりね」

ナルト：「どうか？」

私が笑顔で答えるとナルトが馬鹿みたいに大はしゃぎをして喜んで

いた。

その間に私は靴とかを履きに自来也さんの所に行っていた。

自来也：「嬉しそうじゃのー」

莉那：「はい…一時はどうなるかと思いましたけどね…」

自来也：「…変な事を聞いても良いか?」

莉那：「はい?構いませんけど…」

自来也：「ナルトは九尾の封印をされているのじやろ…」

莉那：「…自来也さんが言う通りです。そして私は…十尾の人柱力です」

それを聞いた自来也さんが吃驚していた。

自来也：「十尾だと!?確かに九尾までのばすじゃが…」

莉那：「…これがその封印ですよ」

そう言い、右肩付近にある黒い封印を見せた。

自来也：「確かに…九尾の封印と同じじゃな…まさか…！…10年前に木ノ葉で起きた事件…」

莉那：「九尾の妖狐の… 事件ですよね。私もその時、いました…。  
と、言つても昔の記憶は覚えていないんですよ…。ほんと、劉冬  
眼で見ていたので…」

自来也：「そうか…」

それから…修行後の疲れということで、御湯に入る事にした。

勿論私は一人から離れた所でエンティを口寄せしていた。

それに、4疋の野獣たちも一緒に口寄せをしていた。

だつてね……自来也さんに見られたら

それにこの子達は良く鼻が効くしね。

『お前は強くなつていつてるな…』

そう、あつがとう、十尾へへ

何かアカデミーに通つてた時、話かけようとしてたんだけど、ビリ  
も無視されっぱなしで…

だけどたまに十尾の方から話かけてきて今では中が良いんだよね w  
w

十尾も素直で本当、頼もしいしね

\* イン夜\*

莉那：「やっぱ夜つて最高」

そんな事を言いながら屋根の上を飛び越えていた。

つてあれ? ハヤテさん?

そう思つて近づいた時だつた。

ハヤテさんが剣を持つて砂の人に向かつていつた。

だけど惜しくも砂の人がそれを間にうけ、殺されそうになつた時に  
だつた。

莉那: 「やめてください……。」

砂の: 「ほん……君は……我愛羅の攻撃を阻止した……。」

莉那: 「ほんな夜中でござつしてハヤテさんを殺さうとするのですか  
?」

砂: 「いえいえ。そんな事はしませんよ。このお方はお返しします  
よ」

やつぱりで、ハヤテさんを物のようにつかに向かつて投げてきた  
けど……

水がそれを呑く受け止めて、私の近くで寝かせた。

砂：「そりそり・・・言つておきます。  
我愛羅とはどんな関係か知りませんが：これ以上彼に近づかない方が良いでしょう。

彼は君を殺すかもしれませんしね…。それに彼にとつて君はただの知り合いですかね」

莉那：「そんな事…無い！！！」

我愛羅は殺したりなんかはしない！！！」

砂：「何故そう言い切れるのかね？」

莉那：「私は…我愛羅を…信じてるからッ！！！」

我愛羅にとつてただの知り合いでも…私にとつては…大切な人！！

絶対に殺しはしない！！！」

砂：「ほつ…信じてる…ですか。例え彼が化物だとしても、大切な仲間だとか言えるのですか？」

莉那：「…………」

『いやあああああッッ！…………！…………！』

『お母さんッッ！…………！…………！…………！』

莉那：「……聞える……我愛羅は化物なんかじゃない……貴方達がそう言つから……我愛羅は……！」

砂：「そんな綺麗事を…………死ねッッ！…………！」

そう言つた時だつた。水を底いに付けようとした時……砂の人が宙に浮いていた。

砂がその人の首を力強く縛つてゐる事が分かつた。

そして私の前に我愛羅が現れてその人を睨んでいた。

我愛羅：「…………莉那に…………手を出すなッ…………！」

莉那：「我愛羅…………！」

だけど我愛羅の砂が本当に我愛羅の上忍でもある人を殺しそうになつた。

莉那：「やめて……もつこいかりッ……」

我愛羅：「まだだッ……」

バキ：「うわああああああッ……」

莉那：「我愛羅ッ……」

そつ叫んで我愛羅が上げている方の腕を下ろした。

莉那：「もつ…やめて…お願い…だからッ」

やつぱり砂が見る見る内に我愛羅の瓢箪の中に戻つていつた。

そのまま息を切らしながら砂の上忍が戻つていつた。

私は掴んでいた腕を離して、ハヤテさんの元に向かった。

だけど…私が出るのが遅かったのか…大量出血をして、もう死んでいた。

私がハヤテさんを蘇らせようとした時、右腕を掴まれた。

我愛羅：「むやみに人を蘇らせるな」

私はその手を振り払つよつとして、腕を左右に振つた。

莉那：「どうして……何で私がやられたと思つた事に邪魔するの…」

我愛羅：「……昨日、それで意識を失つただろ。」

莉那：「…………」

我愛羅：「何があつたかは…知らないが…やめておけ」

莉那：「…………そのままにしておけどでもいいの…」

我愛羅：「他にじつひつといふ訳だ？」

莉那：「…………」

我愛羅が腕を組んでそのまま、どこかに立っていました。

莉那：「……我愛羅……ありがと。助けてくれて……」

そう言つた。やつき、…助けて貰つたしね。

そう言つと我愛羅が一度止まって、それでまた歩きだした。

(田嶋洋)

莉那：「ああ…………寝坊…………！」

只今……10分寝坊した。

すぐさまナルトの部屋に行くと、ナルトがクマの付いた顔でしゃが

を見てきた。

莉那：「ナルト…生きてる？」

ナルト：「なんとか…」

つて違ひシ—！—！

莉那：「あー！…ナルト！…早く起きて朝ごはん食べてこくよ  
！…！」

ナルト：「ああ…-----そつだつた-----  
けねツ…!!」

それから…素早く朝ごはんも食べ終えて私たちは本会場へと向かつた。

## 011\* 第二試験、暗殺（前書き）

無事、会場に到着したナルトと莉那。

だけじゃなくて、見たくもなかつた人がいたのだった…。

それは、六年前、我愛羅を暗殺しようとした…我愛羅の父親でもある風影様がいた…。

011\* 第二試験、暗殺

莉那：「何で…風影が…」

ナイト：「何か同盟だからと。つてか風影じゃなくても良くなーね？」

歌怨：「砂の奴らに丸聞こえだぞ」

莉那：「馬鹿～」

ナイト：「てめーが言つたんだろーがーーー！」

莉那：「そりだっけ？」

ナイト：「はあ…そりこえば今日は龍驤刀を腰に翳して、やる気満々じやん」

歌怨：「今日の相手は相当強いと莉那も思つか？」

莉那：「…一応ね。もし…当たつたらって感じで」

すると二人は黙つて、何故かお互い、見合つていた。

ナイト：「それって……あの砂漠の我愛羅の事だろ？」

莉那：「…………そう……かもね」

歌怨：「……莉那。中忍試験が終わつたら……砂の奴との関係とか教えてくれないか？」

莉那：「…………」

歌怨：「無理に教えるとは言わない……だが、お前が良くな悲しそうな表情をするからな……  
悩み事でもあつたらいつでも相談しろよ」

ナイト：「俺ら、スリーマンセルだろ（ニカ）」

莉那：「……歌怨……ナイト……ありがとう……後で……聞いてくれる？」

「「勿論だ／だぜ」」

私、この二人とスリーマンセルで良かつたって…思った。

こんなに和解出来る人たちはそういない…。

本当に歌怨とナイトが同じ1-1班の仲間で良かつた。

試験官：「本戦の前に…トーナメントを少し変えたから…確認しておいてくれ」

それを見ると…一回戦は滝隠れの人で…二回戦日が…カンクロウ？  
か草の人？

試験官：「それじゃー、一回戦日は「まきナルト」と…ひゅうがネジだな。

その他の者は上に上がっている。

それと予選と同じでルールは無し。ただどちらかが死ぬか負けと認めた時には終了だ」

莉那：「ナルト、頑張ってね」

ナルト：「おう…任せろつてばよ…莉那姉ちゃん…！」

ナイト：「とか言つて負けんじゃねーぞ。」

ナルト：「余計なお世話だつづーの……。」

シカマル：「マジかよ…女かよ…めんどくせー」

莉那：「戦つ前からやる氣無れやうだね~~~~」

シカマル：「仕方ねえだろ。あーあ。最後まで残るんじやなかつたよ…本當めんどくせー」

莉那：「シカマルつてさ…」

シカマル：「あ？」

莉那：「必ず言葉の最後には“めんどくさい”が入るよね…まさかの口癖？」

シカマル：「答えるのもめんどくせーよ」

莉那：「何それ？……」

ナイト：「おー。早く行くぞ」

と、ナイトの言葉で待合室に向かつていった。

だけど……行こうとした時、この間、ハヤテさんを殺した砂の上忍に出会つた。

通りかかった時、その人は耳元で『この間の事は誰にも言つな。』  
と言つていた。

アンタ達がやるやうとしてる事は……劉冬眼で見させて貰つたから……。

悪いけど木ノ葉を潰させないから……

歌怨：「莉那？どうかしたのか？」

莉那：「何でもない……」

\* 待合室にて\*

「」はすつじく見所の良い所だった。

それに…人という人があれなんだけどさ…

何で私の左隣がカンクロウな訳？

ものつすじくついてないかもね…。

ナイト：「アイツも良くやるよなー。真正面から行くなんてよwww  
『』

シカマル：「それがナルトなんだしよ。めんどくせーケド、アイツ  
の考えはすじいぜ」

莉那：「流石は私の弟だ」

歌怨：「…そつか。よかつたな」

莉那：「だつてさー！あんな弟、私は誇りに思つよーーー思わない

？」

我愛羅：「…………」

ナイト：「ゼウスー思わねー」

シカマル：「…思わねーよ」

歌怨：「さーな」

莉那：「何で！？私はすうじへ思ひよーーーー。」

そつ言つた時だつた。

マコト：「莉那はいるか？」

莉那：「はい？」

マコト：「お。調度良い所にいたな。お前に聞きたい事がある。少し試合観戦は出来ないが……」

莉那：「なんでしょ？」「

マヒト：「負傷者を治して貰いたいんだ」

莉那：「了解しました」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8073w/>

NARUTO～ナルトの義理の姉は十尾の最強忍者～

2011年11月26日21時50分発行